

處で、ダンニイは、頼まれたら密告位出来ない事は無からうと誰れでも思うだらう。此の男に何か恐を懐いて、看守に話せなかつたなんと云ふ事が有らうか。なかなか彼は誰の事でも暴露く位の事は平氣でやつた男である。乍然今ダンニイは昔を顧みて、自ら非常に耻てゐる。そこで、漸々過去から遠かり、精神の幸福と平和を増すに随つて、奈何か昔の黒い影を忘れ度いとの願が、愈切になつて来る。それにしても、彼の初めての犯罪が、非常な重罪でもあつた如くに言ひふらし、人から、彼は幼い子供の小使錢を強奪した卑劣漢だなどは思はれ度くない。何か恐ろしい強盗であつた様に思はれ度いのである。呆氣に取られて物が云へなると云ふのも、實は彼が密告した事を氣取られ度く無いからだ。彼が斯く詐るのは、悪い事には相違ないけれども、我々は其心中を察して赦して遣り度いのである。

色々訊いて見れば見る程、此の男は、實に卑怯で劣等で、汚穢、醜陋を極めたあらゆる性質を有つてゐたのである。思ふに鄙陋の事此の男の行らなかつた事は無いであらう。斯くまでに下劣な人間であつたことを知るにつけても、その性格の革新の素

晴らしいのを見ては、只驚くの外はない。

夫の「拳闘家」が回心すると間も無く、ダンニイは捕へられて長い懲役を宣言されたのであつた。言ふ迄も無く、彼は「拳闘家」の話を知り、「拳闘家」の昔仲間と合宿所に落合つては、其奇蹟を嘲笑つてゐた。然るに牢屋に這入つて見れば、扱て永い永い刑期の物憂い日々が思ひやられる。「拳闘家」の回心と云ふ事が、不思議に心に附き纏つて、化物にでも附かれた様である。「拳闘家」は以前酔つばらひであつた時よりは確かに善くなつてゐる。その家庭は美はしく、食物は充物、御馳走は澤山で、衣服も可なりであるらしい。警官はもう彼の後に附く様なことはなく、全く自由な事であらう。思へば彼は、どうにも致方の無い悪者で、その上大酒飲であつた。あんな酒好の男が、一朝にして杯を棄てるとは不思議な事だ。如何云ふ理であらうか。全く解らない。あの酒飲、あの大酒飲の「拳闘家」が、今は心を潔められ、貴い人間になつたとは！

数日の間ダンニイは、牢屋の中で獨り、悄然と此事許りを考へて居た。綠樹も蒼空

ゐたものゝ、神とか、實在とか、永生とか云ふものに就ては、何か定まつた思想を持ち得る筈がなかつた。彼が宗教に關して「己は、宗教の事は少とも考へなかつた」と云つた言葉には、深い／＼意味がある。彼は犯罪のこと、詭計や、下等な悪戯の事に就ては、種々な考へを持つてゐたが、人生とか、その意義や責務とか、その他諸の人生問題に就ては一つもまとまつた考へを有つて居なかつたのである。

しかるに今や、神に關して彼の頭の中に、第一に起つた觀念は、神は救の神であり、それとは判然言ふことは出来ないけれども、兎に角自分の不幸を變へて幸福となし得る力の神であると云ふ事であつた。そして己を助けて救ふてくれる或者の力を信じて、少しも疑ふことなく、之に全く身を任せたのである。尤も其任せ様は、ダンニイ相應なやり方であつた。少し語弊はあるかも知れないが、彼の賤しい囚人が、神にお催促をした姿である。「若し神様があの、「拳闘家」を救つたとすれば、己だつて救はれぬ事は無い」と云ふ語の中には、自らを義とする考へがある。

神に達するには、是非祈りをしなければならぬと考へた。そして牢屋で始めて膝を屈げて祈りをした。彼は未だ若いのに、十二年間と云ふものは牢獄生活をやつたのだから、宗教を解する機会を與へられなかつたのである。神に思を馳せた事等は、一瞬間だつてありはしない。が兎も角膝を屈する丈の事は知つてゐた。それとて奈何な心で跪いたのか、それはよくは解らない。兎に角墮落した獸の如き人間が、跪いて祈つたことは注意すべきである。

彼は長い刑期の間始終祈りながら、出獄の上は幸運が向て來て、萬事善しと云ふ様になり度いと願つてゐた。

出るや否や彼は「拳闘家」に迎へられた。是は祈の應驗の緒であつた。

「拳闘家」は例の靜かな賢い態度で徐に話しかけた。ダンニイの送つて來た生涯は實に腐れはててゐる。歲月は容赦なく進んで、最早や中年にも近づくのに、十二ヶ年も牢獄生活をしたとは何事だ。從來のことが少しでも骨折甲斐が有つたらうか。又幸福であつたらうか。と云ふ調子で始めたが、扱てダンニイは一向感じない。此の様な論法は成程酒飲には適當でよく解りもしようが、肉體上の慾の無い、只犯罪だけで

固まつてゐるダンニイの頭には、仲々這入らないのである。そんなことで彼の思想は改まらぬ。その脳中に蟠つてる汚物を除き、幼少から狡狡姦詐に捕はれてゐる頭を改めさせるのは容易でない。右の説法から得た一つの結果は、ダンニイをして、決して再び警官に捕り度くないと告白せしめた事であつた。

話は道徳から宗教に移つて行つた。「拳闘家」は宗教の齋す精神上の平和、正義に活くる生涯の愉快さ、人の罪を拭ひ去り、魂に新しい生命を與へる神の力に就いて語り、救はれるには神に來るの外無い事を諄々と話した。

此れにはダンニイも大いに感じて、是非救はれ度い。宗教を信じたつていゝ。が労働は如何するんだ。働かねばなるまい。實はそれが第一忌なのだが、奈何したらよからうかと云ふ問である。

「神様に任せなさい」と「拳闘家」は答へた。

此の答は立派であつた。是によつて、彼の靈的經驗の如何に深いかを表はして居る。「拳闘家」は、ダンニイの現在の有様では、到底長い面白くも無い労働を續ける勇氣も

無いし、また信者になるにも、只牢屋の苦しみから免れるとか、樂な仕事を爲度いとかの目的でなるのだと云ふ事を克く知つてゐる。然りながら、先づ回心させて置けば、後來は労働や宗教に對する態度の大變化も自ら來るに相違ない。何は兎もあれ信者にして置けば、若し忠實な心さへあれば追々と、骨の折れる退屈な仕事でも喜んで爲る様になるのであらう。回心させるに限る。さすれば、己が心に聖い喜びを與へた宗教の爲めに、餓死しても盡すと云ふ考にもなるに相違ない、と信じたのである。

「拳闘家」が回心の力を信する事は概ね如斯で、新生は彼に取つて嚴然たる事實であつた。而してダンニイにも實際次の様な事件が起つたのである。

ダンニイは救世軍の集會に來た。そこで天使中校が、神の愛は如何なる惡人をも抱容して呉れると話すのを聽て、光が心を照す如く感じられた。遂に突如として、己が空虚な心にも愛が無くてならぬ事を悟り、打碎かれて悔恨に満ちた精神を以て、悔改の座に出て跪き、茲に始めて、無限者たる神にまで本當に到達したのである。彼は神の憐愍を請ひ求め、力を與へられんことを切に祈つた。

彼が起ち上つた時には、最早や元のダンニイでは無かつた。その變化は實に素晴らしく、又完きものであつた。彼の殘忍な心は、女のそれの如く優しくせられた。狡猾な竊盗心は間違ひのない正直と入れ更つた。のらくら者の仕事嫌で、一日だつて働いた事の無い男が、勤勉な労働者となつた。極めて野卑で、慾深い人間が、他人の事も考へ、宗教運動の爲めには、自らをも、金錢をも共に喜んで獻げる者となつた。彼の知友は云ふて居る。

「ダンニイの偉く變つたのは、其の優しくなつた事である。今は一疋の蠅を殺す事でも嫌がつてゐる。慘酷な、痛ましい話、殊に子供の事で痛ましい話しでもしようものなら、氣を遠くする程である」と。實に驚くべき人格の革新ではないか。眞に素晴らしい更生ではないか。

今やダンニイは、某工場の職工長となつて、傭主からは信用せられ且つ尊重せられて居る。又部下の職工達からは、強い意志の下に従ふ者に特有な、叮嚀なる心を以て敬服されてゐる。一生救世軍人たるべき事を約束して、信者の妻を迎へ、共に誠心

誠意、時の許す限り救世軍の爲に働いてゐる。家庭も其地方の模範である。ダンニイは古道具を買ふのに妙を得て居て、近所の人を驚かせてゐる。そのもすりんの窓掛、窓臺に載せた盆栽、敷物、額、安樂椅子、暖爐棚の飾等の立派なことといつたら、近隣數哩の中に較ぶべきものがない位だ。

「本統に、ダンニイは、家庭にとつては、良い親爺です。」

と友人達は賞めちぎつて居る。

今だつて彼の貌を見れば眼を背け度くなるし、其様子を見れば思はず逡巡むのであるが、もう全く汚穢を去つて、善良な心の人間となり、今や宗教に取つては有力な味方となつたのである。彼は非常に子供を愛し慈む。もう泥醉者を虐待することや、偽泣して物乞う様なことはしない。人の爲に働いて倦む事なく、苟しくも善良な事ならば何事でも喜んで援助する。回心によつて彼の容貌、外見は變らないけれども、其の精神は全く新しくせられたのである。

次の例によつても、卑しい心が、如何許り靈的に變るものであるかを知る事が能る

と思ふ。ダンニイの姉妹に一人天主教の熱心家がある。彼女はダンニイが救世軍に加つたが爲めに、以前犯罪を仕事として居た時よりも、尙一層彼に近寄らない。或る日曜日のこと、其婦人が、ダンニイの屬してゐる救世軍小隊の野戦の場所にやつて来て、亂暴にも、公然萬目注視の前で、ダンニイに罵詈誶の言葉を浴せかけ、遂には、ダンニイの口の邊りを殴打したのである。

ダンニイは黙つて他の方に身を退けた。其の顔は恐しく、色は青褪めて灰の如く、兩眼は固く凝つて、見る人を戦慄せしめた。而もダンニイは勇敢にも己に克ち、自若として、無法な姉に手を加へなかつたのである。

曩日の彼を知る者は、彼の態度を稱讃し、その性格に起つた奇蹟を嘆美せずには居られなかつた。

動物以下

「動物以下」の母パーラツプ夫人は、結婚以來樂な目をした事がない。況してその良人が死んだのだから、貧乏人の御多分に漏れず、一人の嬰兒を抱へて、奈何する事も出来なかつた。賃仕事や洗濯をやつて見ても、二人の飢餓を凌ぐには容易でない。何時になつたら貧乏の神から脱れられるか、一寸豫想も付かなかつた。

母親が時偶居酒屋に行く時には、嬰兒もその腕に抱かれて行つて、富裕な家の子ならば、未だ乳母車の布團の上に仰臥になつて、天空許り見せられてゐる頃だが、早くも世間の事を知り始めたのであつた。母親が二度目の良人に嫁いだ時には、未だ嬰兒も云つてもいゝ位の歳であつたけれども、何とは無しにまかせて居て、物が解るらしかつた。繼父は陽氣な男で、酒好きであつた。夫婦が幸福そうに酒を飲みかはそのを、子供は側から視てゐたのである。幼少から酒盛の中に育てられて、貧しい子供は何を考へ、どの様な感化を受けたであらうか。それは誰れにも分らない。

然し多少、彼に意識の發くに從つて、自分ながらいくらか事情が分り、更に長じて理解する力が進むや、早くも人世の並々ならぬ困難苦勞といふことを知つたのである。母親と繼父の間がやがて面白くなくなつて來た。少年の生涯に取つて關係淺からざる兩親は、朝から晩まで高聲に争つてゐる。時とするに、格闘が始まつて、一人が倒される。血眼になつて起上り、背を向けて出て行く背後から追つかけて、更に怒號をあびせかける。子供心にも、手が振上げられると、何が起るか想像が付く。偶には一緒に巻き込まれて、打れたり、揺られたり、烈く撃られたりもする。追々氣が付て見ると、自分のお腹は大抵常も飢しい。空腹々々が先に立つて、何事も考へられぬ。飢餓に迫つた子供の世界は、又格別である。彼は幼い身を以て、餘儀なく自らその腹を満さなければならなかつた。それが爲に盜むには盜んだが、彼のは、貧民窟の多くの子供等が、危い事が面白さに、冒險にやるのとは少々趣を異にして、往古我々の祖先が荒々しく、蠻的に、正直に食を求めた様に、只身體の要求を満さんが爲めに盜んだのである。彼は飽くまで根氣強く盜んだ。食はずに居られ無いから盜んだのであ

る。歐洲の到る處で、多くの子供等は、同じく抑止へることの出來ない此の本能の刺戟によつて盜みをしてゐる。それは幾何程考へたからとて、どうにもならないのだが、實際悲しむべき現象である。それでも子供の心になつて見れば、別に良心の苛責を受る理でも無いのだから、氣樂なものである。眼を光らして警官を看張つては、店の戸に攀ち登つたり果物行商人の車の下に潛り込んだりして惡戯の限りを盡し、面白いことに思つて、遊獵の兩方面を味つてゐたのだ。彼は狐たり又犬たりである。追はれてゐる兎と、追ふ獵犬との危険なことゝ面白いことゝの兩方を存分に味つて居た。彼は捕物を獵ると一緒に、警官からは追はれてゐる。然しいくら敏速と云つても無智の少年が、法の保護を受けて相當にやつてる商人の眼を掠めて、いつも無難に盜をしたり、竊盜、惡徒、人非人、無頼漢を防禦する爲めに、政府が態々莫大な費用をかけ設置した警察の監視をば、遂に免れおほせるものではない。彼は再三再四警官に捕はれて、耳朶を拇指と食指とでつまゝれたまゝ、大道に恥をさらして家まで引つ張られ、さんく兩親に譴責られる憂目を見た。巧く巡查の手を脱け出しても、大抵は

其日の中に、眼の早い若い商人に感付かれて、其店では再び盗みをしない懲戒に、いやと云ふ程鐵拳の御見舞を受けるのであつた。

此の少年の生涯は、得るよりも蹴られる日の方が多かつた。彼が若し、亂れた頭髪は雨に濡れ、破れた衣は風に吹き立てられて、跣足のまゝ寒さにうち慄え、汚れて穢ないまゝに顧られず、頼りなく、飽に迫り、悲惨に往來を漂ふ種類の子供の仲間ではないにしても、少なく共、英國の宗教心を感亂に足る、一幅の繪畫であつた。若しも誰か、早く彼を此殘忍しい中から助け出して、悪い境遇を遁れしめ、潔い、自尊心ある習慣を付けてやり、善や名譽に就いても教へ導き、適當な境遇に置いて人生の幸福を見せてやり、天地の支配者を父と呼ぶ所以の意義を悟らしめたならば、或は文明社會に、又信仰の道に、立派な人間として成人し、悪事から救ひ出されたかも知れぬ。然るに誰も之を試みる者はなかつた。世の豊から博愛者達が、出来る丈の獻物をして立てゝゐる、多くの慈善事業の一つもが、ロンドン市中の殘忍誘惑の中に放任せられて、此の哀はれな浮浪少年を救助しなかつたのである。酔うた繼父からは打ちのめさ

れ、商人達かうは殴られ蹴られ、警官からは不斷追つかけられ縛られて、小虫の様な惨めな彼は、廣いロンドンの真唯中に、母の外は、全く友もなく、一人の助け人とても無かつた。我々に、如斯く困り苦しんでる者を救ひ出すべき策が無いとは、恐ろしいことではないか。

彼は漸く十歳を過た許りで、拙い盗みを行つて捕縛され、犯罪者として留置場になつてしまつた。その翌朝、警察の白洲に立たされて取り調べられ、その結果遂に三ヶ月間、感化院に送られる事となつた。

感化院の組織が善く無かつたのか、それとも子供の性格の中に、悪い根が餘りに深く這入つてゐた爲か、何れにせよ、彼は自分の將來のことを思ふたり、其心を變へやうなどと云ふ氣を起さなかつた。感化院を出る時には、漠然、訓練や規律のことも覚えてゐたが、其心は少しも感化せられてゐなかつた。

自分で自分が厭になり、又窮屈な場所なんかはご免だといつて、十六の時家出をした。それから所々を漂浪た末、他に爲る事も無いところから、軍隊に入り込んだ。彼

は軍隊生活を、確實な結構な「安宿」であると考え、衣服は與へられるし、寢臺もある。食物も先づ充分で、週の終りには飲むだけの金は與へられる。訓練や訓練は嫌だけれども、衣食の爲めだからと思つて我慢して居た。勿論戦争だの、愛國心だの、又は聯隊の名譽だとか、軍隊生活の光榮だとかに就ては、ソホに於ける無政府主義者の考へる程も考へてゐたのではない。

然しそれも東の間で、日を経ては軍隊生活も平々凡々で、胸が悪くなつて來た。遂には幼少の時に見て置いた、繼父の行を真似る様になつて、大酒飲となりはてた。ロンドンの街で散々虐待い目に逢つた少年も、今や身の丈六尺にも餘る、骨格逞しい男となつて居た。その上頭は小さいが、常に酒精で眞赤になつてゐる顔は、いかにも猛々しく喧嘩好に見えた。酒の爲めに失態續きで、持て餘されては居たのだが、彼自身はどんなに罰せられても、恥とも思はなければ悲しみもしなかつた。昇進しようが落ちようが一向平氣である。酒癖が段々嵩じて、自制の力が次第に失せて行くに従つて、訓練や矯正や、懲罰などが益々忌はしくなつて來た。彼は愈怒りつぽく、反抗

心強く、暴々しくなつて、憤怒の心はもはや手の付けられない始末となつた。上官とゴタ／＼を起してゐなければ、必ず同僚と争つてゐる。彼はもう世間の全てを敵として、心底からこれを輕侮し、正氣の沙汰とは受け取れない程のことをやつて居たのである。

そんなゴタ／＼の月日の五年も續けた後の或る日のこと彼は一人の伍長とえらい争を始めた。二人の聲は不知々々高まつて、言葉は益々暴つぽくなつて來た。激怒した伍長は、役目を笠に衣て、威猛高になつて相手に命令を下した。勿論兵卒は従はない。却つて小さい男が豪相に命令したかと思ふと、腹立しさが一倍加つて、狂氣の如くなつた。伍長が更に脅嚇文句を列べるや、酔つばらつた彼は、己ぬ生かして置くものかと云ふ勢で、銃を取り上げて飛びかゝらうとしたのだが、皆に押へられてしまつた。そこで軍法會議に廻されて、六ヶ月間の重禁錮に處せられた擧句「令狀」を交附されて、不名譽の除隊になつたのである。

出獄して見れば、文明開化の世はさすがに廣い。彼とても酒に浸入る前に、先づ職

を求め位くらゐの智慧ちゑはあつた。幸さい給水工事きゅうすいこうじに好い仕事しごとを見付け出して、可成かぢやうの給料きよれうに有り付いたが、土曜日どようびにそれを手にするや否や、早速飲みに行つた。そして再び仕事しごとが嫌いやになつた。生來仕事うまれつきしごとが面白くない性質せいしつと見えて、如何なる労働らうどうも心から嫌である。労働らうどうと聞かだに頭痛づつうがし、氣がいら／＼して、針はりで刺される様だ。面白い事ことと云つたら、先づ酒さけを飲むより外ほかに無い。人生じんせいなんて厭いやなものだ。酒さけを呑んで憂うれさを晴はらし、人生じんせいのことを忘れて仕舞しまひたい。世の中よなかツて一體何だ。七日の内なつち、六日は働はたらかなければならないなんて實際じつさい馬鹿氣ばかきてる！

彼は退屈たいくつで退屈たいくつで堪たへられなかつた。

酒さけの爲ためめに給水工事きゅうすいこうじの職しやくを失つて、此度こんどは酒造場しゆざうばに傭やとはれた。水みづからウイスキーに墮落だらくしたのである。處ところが間も無く之も酒さけで流ながして仕舞しまつた。解雇かいこせられて立腹りつぷくし、泥でい酔すゐした勢いきほで警官けいくわんに暴行ぼうかうを加へ、三ヶ月さんげつの禁錮きんこを喰くふといふ始末しまつであつた。それから出獄しゆつこくすると彼は遂つひに墮落だらくの底そこに陥おちつたのである。

此處こゝに其當時そのたうじの彼の履歴りれきを記す事を憚はげつて、只大凡ただおほよその暗示あんじを與あたへるに止め度い。バ

パーラツプは、飽迄世間あたままでせけんに反抗はんかうし、一日たりとも働はたらきなんかするものかと決心けつしんして、監獄かんごくを出て来たが、とある居酒屋いざみやに入つて、悪事あくじを以て金銭きんせんを得て居る女おんなと一緒になつた。始め暫しばらくくは、女おんなが彼かれに申出た事ことの意味いみを考へもせず、又奈何またどうなる事ことかを全く知らなかつた様である。パーラツプは好い男をとこであつたから、女おんなが心を寄せたものと思つてゐた。それに女おんなは自分の無宿者むしやくしやである事を知つてゐる筈だ。女おんなが、自分の家いへに来て、一緒に宿すまつて呉れというたのは、心を寄せた女の深切しんせつづくに違ちがひない。そう思つた彼は、招まねき應こたじて女の家に同宿どうしゆくし、數日すうじつも過すうち、女おんなは彼かれに小使錢こしかいせんを與あたへて居た。然しかし間もなく女おんなのしてる商賣しょうばいの手傳てつだひをする様に求められた。俄然げぜん彼は、最も下等もととかとうな人間じんかんの仲間入なまかまをしてゐる事に氣が付たのである。

彼は、色心いろしんの苛責かしかくを受ける様な人間じんかんであらうか。左様さやう。先づ此位このくらゐな程度ていどの責苦せきくなら受けた。即ち女の儲たくわけ、兩人ふたりの必要ひつたうを満みすに足らない時には、自ら出みづかて行いつて女の爲ために泥棒どろぼうを働はたらいて来た。全く其通そのとほりで、良心りんしんも何もあつたもので無い。如何いかに墮落だらくした近邊きんぺんの人達ひとたちも、有繋あすぢに蔑あはれすみの眼めを以て彼かれを視た。パーラツプは其人達そのひとたちから身を隠かくし

て、同じく怖ろしい寄生蟲的生活をしてゐる連中と交際つた。其の頃彼は常に泥酔してゐて、醫者に云はせれば、酒精が最早や恢復の望のない迄に、身體を破壊しつゝあつたのである。

今や彼は、空威張りを好む様になつて、もう全くの犯罪者となりすました。犯罪は遊戯であるど心得てゐる。街を通る時には、以前の如く空腹を抱へた餓鬼ではなくて、只咽喉を渴かした男である。そして面白半分、働かないで、金儲する事許り考へてゐる。酔つばらつては犯罪の事で頭が一ぱいである。斯様にして、暫くは情婦を養つてゐたが、やがて注意人物にせられてしまひ、それから云ふものは、断えず警官と衝突してゐた。何遍もなく捕縛されたが、それも警官が六人もかゝつて取押へ、負傷人運搬車に縛りつけて、警察に連込む程烈しく抵抗するのが例であつた。或時彼が、長靴を盗んでゐる處を見付かつて、捕へられた時の如きは、甚く警官を虐待め抜き、遂に騎馬巡查がやつて来て、其馬に彼を括り付けて、警察迄引摺つて行つた程であつた。此の様な折には、常に半殺しにされたのである。そんな理で彼の名は、極悪

な警官虐待者として知られてゐたのである。彼の如き人間に對して、憐愍を加ふる者は、只神のみであつた。

願ればバーラツプが軍隊を除隊せられてから茲に十二年、その中三年は淫猥なる自由の日、九年は入獄！ 何と善からぬ回顧ではないか。この末果して如何に成り行くことであらうか？ 彼とても考へざるを得なかつた。彼の性格も、生活の状態も、久しく評判になつて居たから、近所近邊彼の事も女の事も知らない者は一人も無かつた。其内には夫の天使中校と「拳闘家」も居たのである。兩人は彼に近附いて、墮落の底から救ひ上げようとした。けれども彼は、却て腹を立て、寄せつけようともしなかつた。

然るに時が来て、此の悲惨な者も、中校等の云ふ事を聞て見ようといふ氣になつた。其の時は丁度情婦が入牢中で、彼は一人飢ゑ渴き、辱を覚えてゐる時であつた。十二年の中、九年の獄中生活を考へ、行末のことを思へば何の望みも無い。明日と言へば、それは入獄のために備へられて居る如くである。もう永久に警官に追ひ立てられ

苦しめられて行かねばならぬ。彼は遂に失望、落膽、敗滅の感に堪へないで、何處か逃路を求めたのである。

彼は勢ひ「拳闘家」の事を考へた。あの人の過去と現在との變り様はどうか。眞に驚くべきことであると思ひに沈んで居る中に、ある力に勵まされて「拳闘家」の足跡を踏んで、信仰を得度いと云ふ心が湧いて來た。

パーラツプは、世の中に自分を世話する人としては誰れもなく、皆が自分を嘲笑する事をよく知つてゐた。自らの卑劣、汚穢、淫蕩、孤獨なる事を知つてゐた。警官は彼の敵で、裁判官は罵詈の言を以て彼を投獄する許りである。いくら腕力が強くつても、警察の力に抗するには足らぬ。幾何程社會を悪んでも、我れと我が心を無暗に苛立たすのみだ。自分で自分の生涯に泥を塗り、好んで全世界に容れられない身となつたのだ。今更改めて、善生涯に歸りますと云つた處で、世間は鼻であしらふに相違ない。一人だつて信じて呉れる者が有らうか。彼が最後の入牢の折に、丁度牢を訪ねて來た一人の天主教僧侶に、出てから後自分を助けて、正しい生涯を送らせて呉れる者

はあるまいかと、相談を掛けて見たが、何の助けも來なかつた。何の勵ましも來なかつた。此上は、夫の「拳闘家」を回心させて、眞面目な善い人間とし、美はしい家庭の人にした救世軍の外に、頼る所は無と信じたのである。

かくて光明が、此零落し、墮落した魂にも輝き始めた。「俺は『拳闘家』の生涯をよく見たが、實際眞直な生活をしていやがる。それで神様が、あんな奇蹟をしてくれるなら、俺にだつて、その良いみくじを引けないこともあるめえと思つたんでさ。」これがパーラツプの告白であつた。その言葉使は餘り感心が出來ないが、又甚だしい信迷の慾澤山な用語を用ゐて、「御願が引ける」等と云ふのであつたが、彼の祈願には、言葉には云ひ表はせない程切なるものがあつた。全く奇蹟を求めたのである。兎に角彼の魂は、靈的な方向に進んで來たのである。信仰を得たいと願つたその時こそは、魂が、「我れ起ちて我父に行かん」と叫んで、己れに返つた時である。彼の用語に誤つた處があり、其祈の中には、物質的の意味が多いには相違ないけれども、心の底には彼の靈が動いて、死より覺め、光に向ひ、平安を欲するに至つた事を見逃

がしてはならない。彼の外圍は忌はしきものを以て厚く包まれながら、内は貴くも、神の方へ向つてゐたのである。彼の祈願の起つた源が何であるにせよ、又覺醒の原因が何處にあるにせよ、兎も角、善い人にならうとして、其顔を光に向けたのは疑ふ可らざる事である。

パーラツプは直ぐに救世軍の會館に行つて、後の方に座り、軍歌、祈、聖書朗讀に耳を傾け、説教を聞き、奨められて悔改の座に進み出た。そして跪いて、「神よ、罪人なる我を憐み給へ」と小聲に祈つたのである。

彼の過去は、ポロ衣の落るが如く脱ぎ棄てられて、大掃除を爲た後の様な氣持になつた。上なるものを求め慕う魂は、其處の會館を通りぬけ、救世軍人や祈つてゐる人々を後に残して、不知不識の中に輝き愈増し、満足此上なき光の國へと引き上げられて行つた。黙つて息を殺し、顔を兩掌に被ふたまゝ、跪いて、只射し來る光明、平和、歡喜の思に滿されて居た。その時の感じは、「我救されたり」とか、「我救はれたり」とか云ふ種類のものではなく、先づ夢の如く、而も明白と、遂に全く幸福を得

たりといふ様な、單純なものであつた。

夢幻の様な喜びの思ひが消えたかと思ふと、側には母の慈愛を堪えた天使中校と、父の温顔を表はした「拳闘家」とが立つてゐるのであつた。それは實に極惡の中に陥つてゐた魂に取つては、此上も無い天啓であつた。

其後彼は、純潔な愛情を以て慈み育てられた。精神恍惚たる靈交の喜が、夢の如く消え去つても、最早や孤獨では無かつた。多くの良友は彼を取巻いて、前生涯の汚さを知りつゝも、それはすつかり過去に流して忘れてしまひ、あらゆる深切を盡し、心から信じて呉れたのである。

パーラツプは、力が四肢の隅々まで加はり、精神が強くなるのを覺えた。新しい友の信望に反いてはならない。彼は「私の務が解りました」と云ふ。何であるかど訊くと、今一度行り直すのだとのことである。

聽て中校と相談の上、夫の情婦が出獄した曉には、パーラツプは正式に結婚をして、彼女の魂を救ふを以て、パーラツプ一生の事業の一つとする事に定めた。救世

軍では悔改を軽々しい、容易な事にはして居ない。況んや過去の罪亡ぼしに免罪券を賣る様な事は決してしない。男女に不拘、救世軍に來つて救を求め、キリストの救を受けた結果、隠して居た罪を告白する者があれば、之を獎めて迷惑を掛て居た人の處に行き、それを告白して詫を言はしめ、加へて一切の償をなさしめるのである。是は時々、此處彼處で行はれるのでなく、定まつた軍律として、世界何處の悔改者と雖も、皆之を行ふべき者となつてゐる。故に救世軍の悔改の座に來つたもので、己が犯した大罪の未だ露見せられず、又暴露する事も六ヶ敷いと云ふ罪状を自ら正直に告白して、進んで監獄に行き、悔改の確實であることを證明する者も少なく無いのである。

パーラツプは新生涯に入つて、先づ花の呼賣をやつた。やつとお金を工面して、花の鉢を二つ丈け買ひ求め、街を呼び歩いて漸くそれを賣つたのであるが、偶々二つ目を買つた人が、パーラツプに同情を寄せて深切に話し掛け、二三日仕事をさせて呉れた。次には救世軍に好意を有する某貴婦人に、六週間程傭つて貰つた。そして兩方が

ら、正直で真面目な稼ぎ人であるとの、確かな證明を與へられたのである。然るに二度目に備はれる前に、夫の情婦と最後の離別をしてしまつた。その経緯はかうである。パーラツプは中校と共に女の出獄する日、監獄署の戸口迄迎へに行つた。女は救世軍の人を見て驚いた。暫くじろく／＼見てゐたが、やがてパーラツプの方に眼を轉じ、當惑相に立つてゐる。そこで中校は、パーラツプが潔い、貴い生涯を送らうと決心し、新しい生涯を始めるに就ては、先づその情婦たる人と、義務を守つて正式に結婚し度いと云ふ希望だから、その結婚前に、女が救世軍の婦人ホームに入つた方が好都合であらうと云ふことを述べた。

茲に於て毒婦は、悪口を亂發した。婦人ホームに這入るなんぞは眞平御免。パーラツプが自分と結婚し度い等とは、よくも云へた事だと云ふ權幕である。中校が優しく云へば云ふ程つけ上り、益々暴言を放つて輕蔑する。中校は、色々説ても到底駄目だと思つたから、靜かに彼女の罪惡を責め、之に反省を求めようとした。すると輕蔑の言葉が變つて呪咀、冒瀆の毒言となり、どうにも手の付け様が無い。今は是迄と中校

等は、あきらめて歸つて行つた。然るに氣婦は何處までも従いて来て、中校に伴ふて街を行くパーラツプを目懸け、衆人にこれ聞えよがしと許りの大聲で、彼の前生涯を暴露き、呪ひ、罵り、はては唾をさへ吐きかけた。然しパーラツプは血相を變へながらも、黙つて之を耐忍んだのであつた。眞に獅子の洞穴に臨む方が、之よりは容易かつたかも知れ無い。

中校は私に語つた。「其時私共は、乗合馬車を呼んで、女を無理にそこに残して歸りました。何分女が罪の生涯を棄てようと云ふ心が無いのですから、奈何して遣る事も出来ません」と。然り「罪の生涯を棄て度い」と云ふところが大切なのである。此願望が無いならば、どの様な援助も徒勞である。その魂が、惡を憎まうとしない者には施すべき術が無い。善を欲しなければ何事も不可能だ。

折角純潔な、義しい生涯に入り度と奮闘してゐたパーラツプは、暫くはかの女に惱まされた。彼が行く處と言へばどこでも、女が後を附けて来ては人の前で罵つた。あらゆる手段を盡して、彼を引き墮し、心を破り、狂はせようと試みた。それでもパー

ラツプは、自分の職業に熱中して、側眼もふらず女の惱ますのをよくも耐へて、決して後戻りをしなかつた。

パーラツプは、今一つの仕事に心を懸けた。此情婦は、右の如く救はるゝことを拒んだが、パーラツプが救ふべき婦人が今一人有つた。それは彼の母親である。

茲で私は、諸君が此男の魂に起つた回心の結果と、悔改の果實とを、靜かに、眞面目に考へられん事を望むのである。それは確に深く味ふべき價値の有ることである。彼が幻少の時から、窮乏、艱難、罪惡の中に育ち、人と成つては、竊盜、四戸、凶暴漢、泥醉漢の生涯を送り、全く動物以下であつた事を考へられよ。それが一瞬にして回心し、勞働に堪へ、以前の犯罪仲間から嘲罵せられつつも正直、眞面目な精神を保持し、更に進んで、行衛知れざる母を探し求めて救はんとする彼の心を見られよ。パーラツプに就て考へれば考へる程、宗教の偉大な力を思はざるを得ない。回心の結果、眞面目に勤勉になつた許りでなく、あれ程好きであつた酒を廢し、あれ程嫌ふてゐた勞働を愛する様になつたのだから、それ丈けでも奇蹟である。回心の齎した處

はそれに止らなかつた。彼の魂にまで浸みこんで、善事の妨害をして居た悪習慣は、一舉にして除き去られ、道德的狂暴の衝動は打ち亡ぼされて、忽ちに柔和、慈愛、謹慎、純潔の人に生れ更つたのである。否たゞに自らが救はれた詐りで満足してゐなかつた。即ち平安を一人で偷み、自ら義しと己惚れる様なことはなく、聖靈の導きに従ひ、喜び勇んで隣人を救ひに導くために努め勵んだのである。

先に述べた如く、パーラツプは母を探し出して、改めて孝養を盡さんとの一念に驅られてゐた。催眠術でも、酒癖を亡す位のことには出来たらうが、行衛も知れぬ母親を探し出さうと云ふ心は、何處から生れて來たのであらうか。

彼の思がかなつて遂に母を發見した。その時母は、既に繼父から棄てられて、慘めにも年老ひ迫る身をもつて、艱難に苦しみ、殘虐にさいなまれながら、孤獨に泣いて居たのであつた。パーラツプは己が生涯及回心に就いて物語り、共に歸つて家庭の人となり、幸福に暮すやうにと願つた。

是は新「放蕩息子物語」である。むしろ此の方が貴いかも知れない。その單純にし

て傲らざるところは、寔に比類が無い。此の放蕩息子は、聖書の話にあるその様に、立派な住家や、富んでゐてその上義しい父が愛をもつての待つてゐるのを、豫期して歸つたのではない。自ら目を覺して自己に返るや、喪はれたる者を救はんと決心し、罪と狂暴の中に居たために、永年忘れて居た母を探し出して、己が家と愛とをこれに捧んと思ひ起つたのである。嘘の様な話ではあるが、パーラツプは母を遠くに認められた時、直ちに走つて行つて其の頸に抱き付いて接吻をしたのである。彼が母を求め心の如何に旺んで、情熱に燃えてゐたかは推して知るべしである。

母親が彼の云ふ事を承諾て呉れた時にはうれしかつた。死から引き上げられた思の母親は、強そうな我子に縋り付て、二度と再び棄てるやうなことは爲ないで呉れど、又悲惨な目にはもう遭せてお呉れでないよと、涙ながらに根限り願つた。わが子に泣き付たその様は、恰も神に泣きすがすがしく如くであつた。神に救はれた息子は、神の力によつてその母を救つたのである。彼等が始めて相抱くや、お互にしみじくと信仰の必要を感じ、靈的の平和の有難さを感じたのであつた。宗教なればこそ子を救ひ、宗教

なればこそ其の子を遣はして母を救はしめたのだ。信仰無くして暮した時には、兩人共さんく不幸な目を見たが、今や、靈性に覺めて、宗教のみよく人生を純潔にし、愉快にし、意義あるものたらしむる事を知るに至つたのである。

パーラツプのお母さんは、初め自分を救ひに来たのは我子であるとは信じられなかつた。又暗黒生活の怖ろしい悪夢が、最う逃げてしまふのだとは思へなかつた。そしてパーラツプに伴られて、悲しい境遇をのがれ、深切に備へられた家に歸された時には、全で「アラビヤナイト物語」中の人物のやうであつた。宗教の中には如斯き現世的魔法がある。

パーラツプの家庭は實に立派で、幸福なものとなつた。

一體ロンドンの労働者は、家を出来る丈け飾つて、豊からしく、居心地のよい家庭であることを、人に見せることを好む風があるが、彼の家庭も美はしく飾り立てられ、家財諸道具は常に奇麗に掃除が行届いてゐた。それは言ふまでもなく母親が、息子のために、救はれた禮心で、終日幣を離さないで立ち働くからである。母も今は救世軍

に入つて、同じ信仰の人となり、親子の間は實に深い慈愛と、孝心とで結び付けられて、こんなには仲の良い間柄は、何處にもないと思はるゝ程である。息子は時々、貯金の中から少しばかりの買物をして、母を喜ばせる。貧しい者であるから、ほんの心持に過ぎないのであるが、母はために、如何ばかり慰められたことであらうか。母は又母で、夕食に御馳走を備へたり、自ら骨を折つて、シャツ類や衣服やらを整頓して置く。之は子の愛と親切とに對する、感謝を表はすものである。兩人の愛は羨ましい位で、パーラツプにとつて、その生涯に誇るものがありとすれば、それは母親に孝養を盡すことが出来たといふことである。

人或ひは此男は未だ完く幸福になつてはゐない。未だく過去の記憶の爲めに惱まされて居るだらう。回心した當座は、全く心が光に領せられたかも知れないが、しかし昔の罪の黒い陰から免れ切れることは、まづ出来ないであらと思ふかもしれない。世の中には、今日に至つても尙、彼に昔の事を免や角言ふ人が居るのは、困つた事である。ロンドンの貧民窟で、悔改めた生涯を、墮落しない様に保つて行くのは、

如何程困難な事であるか、それは實際想像も及ばない程である。

過る日、バーラツプは友人に、暗い過去の話をして居たが、突然立ち上り、自信のある、静かな、軍人らしい應揚な態度を以て云つた。

「私がもう一度昔の生涯に歸る事を願つてゐるものが五六人はゐますよ。え五六人！然し後戻りする事は無いです。神様も知つておいでの様に、私はまだく足りませぬ。しかしこれでも以前よりは、ずつと善くなりました。

此證言は決して自畫自讚では無い。バーラツプは今に至るまで、彼の回心は第二の機會であつたと云つてゐる。彼は殊更に神の愛を喋々しない。只信仰の旅路の長い事をよく知つて、自ら慎んでゐるのである。神は彼に第二の機會を與へ給ふた。彼は此信仰に堅く立ち、此の機會に處して誤らざる様、己が身を責めてゐる。「私はまだく足りませぬ」と云ふのは全然眞實である。而して、限り無き感謝の念を以て神を仰ぎ「それでも以前よりはずつと善くなりました」と證言するのである。

鉛板工

「鉛板工」の生涯は、もう初めから善くなかつた。六歳の時から、毎朝母親の「甘露」を買ひに、居酒屋に遣られたものである。朝未だ暗い間に敲き起される腹癢せに、買つて歸る途すがら、麥酒やジン酒を盗み呑むのであつた。殊に、他の子供が見て居る時を選んで、敵討の啜飲をやつた等は、小兒の好奇心を克く表はしてゐる。これは母親に對する一片の仕返しであると同時に、子供に見せびらかして、威張り度いのである。僅か六歳の子供にも、斯様な心があつたのである。

先頃、新法律の制定によつて、禁じられたが、従来ロンドン市中で朝早く、半裸體の、素足の小さい子供等が、麥酒壘を手にして、家々の軒近くゾロ／＼歩いて行くといふ光景がよく見られたものである。此の光景を見た人は、彼等少年が將來奈何方向に發達して行くだらうかと悲しんだのである。今茲に記す物語は、實に其の生涯を如斯にして始めた男の話である。

彼の父は頑固な、残忍な性質の人ではあつたが、酒は飲まなかつた。反之、母親は、文字通り「酒に耽溺」してゐた。朝目の覺めるところからもう酒を呼び、終日飲み通して居酒屋の亭主が店を閉ひ、其日の清算をする頃が最も甚だしいといふ調子であつた。彼女は街の辻や、袋町の入口や、酒場の腰掛に見られる無頼女の代表的な一人であつた。帽子を被つてゐることなどは滅多に無い。髪は蓬々として頸に垂れかゝつてゐる。顔に流石に太つて桃色に、柔か澤々してゐるが、暑くなれば汚れた前掛の端で、無造作に拭くのである。體格は肥大で、腕逞しく、乳房の大きい、腰の廣い、肩の圓々とした、太つ頸の女である。眼は小さいが險悪く、唇は根性の悪さを現はし、聲は唄れて底力がある。恚した母親は、今から三十年前には、よくロンドンの貧民窟にゐたものであるが、今日でも、小さい白い顔をした鼠か白鼬の様な人間の中に、間々見受られるのである。彼女は仕事を爲ない。子供等は二錢銅貨を一つ貰つては、辻店や、コーヒー店や、天麩羅屋で食事をするのである。食事を家でしないで、料理屋でする習慣は、今日では裕福な人々の間にも普及した。由來、上流社會が下等社會の風

習を學んだ事が少くないが、是も其一つである。但し此の「鉛板工」の母親の場合には、女中を置くには置けないし、そうかと思ふて自分で家の事を爲るのは、心底から嫌ひなゆゑ、子供を外に出したのである。蓋し働き嫌ひは貧民窟の通弊である。父親は土方であつたが、妻の耽溺を癒さうと氣をもんだ。果は腕力にさへうつたへた。女がそれを恐れてゐたのは、誰の目にも見える程であつたが、然し此腐れ切つた代物は拳が飛んでも、釘だらけの靴で蹴られても、はたまた笞打れても、仲々耽溺から脱れさうにもない。いくら責め立てても無駄である。それに加えて時々は、食事の準備もしてないまゝに、土方は業を煮やし、子供等に當り散らして、溜飲を下げるのであつた。彼の額はしかめ勝で、眼はうるみ、聲はだれ切つて居て、神をも人も呪つてゐるやうである。家庭には幸福なんぞは勿論のこと、珍らしいこと一つありはしない。これに似寄つた家庭は、ロンドンに數へ切れない程ある。戀愛神が、ロンドンの貧民窟に天降つて、眞目な男に泥酔女を結びつけたり、泥酔漢を眞目な女に縁結びさせたりして、不釣合の夫婦を作つて行くとは、随分の惡戯である。それもよいが、い

つても泥酔者の方に勢力があるのだからたまらない。此話の主人公の両親も、ロンドンの街上で悪戯をし、一錢二錢を手にしては、アイスクリームを賣る伊太利行商人の俗美の露店に走る多くの子供等の親達と、變る處は少しもなかつた。

されば此子供が六歳にして、前述の如く狡猾であつたのも決して不思議ではない。こんな汚穢な町では、長じた子には當然犯罪となるべき悪戯を、極めて幼い年でありながら、巧みにやつてのける子供が珍しくない。此の子供は生來伶俐で、敏捷で、快活で、滑稽な性質であつた。今でも、ふざけた、面白い滑稽歌手宜くの顔をしてゐる。家庭では毆打されたり、面白くないことが多かつたが、外に飛び出して意地悪い事をしさえすれば、心のむしやくしやが晴れるのであつた。彼はロンドンの町を漂泊して、何か掘出しものを見付けようとしてゐる小さい、飢い、汚れた顔をした子供達の一人であつた。彼は働けば充分に働ける賢い子供で、自分丈の必要な金を儲ける程の事は何でもなかつた。牛乳屋の小僧になつたが、手品の様な事を速早くやつて、一日二十錢から十六錢を儲けた。それは鐘から牛乳を量る時に、柄杓から零れ落ちる乳

を自分の鐘に受け、それを溜めて置いては賣つたのである。そこにくらくりはあつたにしろ、主人には解らない様にやつた。懐は暖になる。實に敏捷な愉快な少年だと云ふ評判が立つ。直ぐに店の良い地位に廻はされることになつた。其處は盗みをするに極く都合の好いやうな處であつたが、盗むや否捕つて、投獄せられた。

生れたときから不道德の中に育つたのではあるが、感じの速い子供であつただけに、懲戒を受けて多少考へた。出獄した時には、決して二度と牢に入るやうな事は爲まいと思つた。で改心の風が見えたので、助ける人があつて商法を習うことになり、鉛器具製造兼瓦斯燈取附の商店に奉公した。

「鉛板工」は言葉に力を入れて云ふ。

「世の中に鉛職程厚い商賣はありませんや、厚いとは道徳上極惡な意味である。「今は如何ですか、少しは善くなつてれば結構だが、さあ善くなつてりや不思議でさあ。しかし昔のことを振り返つて見れば、鉛職人程の泥棒仲間先づありやせんよ。何故だかそいつは解りませんが、大工だつて其他の仕事だつてあんなぢやない

でさあ。鉛板工と来ちやあ、全然、悪けりや悪いなりで、改めると云ふことを知らな
いんだから實際そりや酷いですよ。ロンドンの鉛板工を備つて、屋敷に入れて置くな
んざあ、まあ泥棒を飼つて置くやうなものですよ。あんまりひどい言方のやうにもそれ
るでしょう。又鉛板工が皆それだと云へば、奇態にも思へるでしょう。だが仕方がな
い、全く眞實ですよ。」

「鉛板工」が、こんな悪漢共の居る店に来て、先づ出會つたのは虐待であつた。少年
の奉公人が店入するとすぐ、残忍酷薄なる取扱を受けるのが、ロンドンの極貧な町
では通り相場になつて居て、相當な人々でも、禮儀を守るとか、清潔にするとか、愛
情を注ぐとか云ふ事は、柔弱な人間の爲る事だと考へてゐるらしい。ロンドンの公
園、例へばレゼンド公園に行つて見ると、澤山の貧乏人の子供が群つてゐるが、彼等
の間に優しい、美はしい言葉の交はされたのを聞いた事がない。姉と妹との間でも、
遠くから、叫び合つて、丁度喧嘩でも始めてゐるやうに聞える。

「来いつてば、来ないかよッ？」「エムミイ、私の云ふことが聞えんかッ？ 直ぐに來

いッ。「八ヶ間敷いッ。「詐ツつきッ」と云つた調子で、此の種の毒々しい叫び聲が、
ロンドンの貧兒の用語である。それは英國々民中に廣く潜在してゐる、特殊の性質の
一部を表はしたものに過ぎない。即ち不幸悲惨の中にあつても、黙々として之に堪え
る一種頑強嚴格な性質、或ひは窮乏、落魄の中に在りながら、之を以て極めて當然
な、又人生の實相であると觀念せしめてゐる處の、不撓不屈の精神の一部を表はした
ものに過ぎないのである。多くの労働者は私に語つて云ふ。「上流社會の人々は、
浮雲の如き人生を送つてゐる。それは恰も保育所の子供達が人形の家をもつて、まよ
ごとをやつてるやうなものである。眞の人生は、貧困と戦ふて生くる困難な生涯の中
に在る」と。

「鉛板工」はまた曰く。

「えらい深切な目に逢ひましたよ。二尺の鐵定規が曲る程胴を打たれるなんざあ、
全く冗談ぢやありません。何か奴等の望み通りにしないとか、一寸でも間違をして
かそものなら、ヒューツと定規が飛んで來る。二三日は苦しみ通しますよ。一寸

横目で何かしたとか、口答をしたとか云つて、子供の頭に白蠟の煮へてゐるのを浴せ掛けたのを見た事もありません。私等は勢ひ狡猾にならざるを得ませんでしたよ。」

彼が最初の経験は、此様に残忍冷酷なものであつた。然し生れつき理解力の敏い子で、眼は猿智慧に光つてゐたし、直ぐに仕事を覚えて、業も上手になり、加之に、他の人よりは主人の目に善く見られる性質を持た、快活で、面白い腕白小僧であつた。酒を飲む事なら教へを受ける迄も無い。小僧によつては、随分強いられて漸く飲める様になるのだが、少年「鉛板工」は初めから大好きである。飲めば大人のやうな氣になるのが面白い許りでない、酒そのものが好きなのだ。酔つては楽しく、歡ばしく、大膽になるという始末で、奉公してゐる間、毎日酒を飲んで居た。そんな風に、子供の時から成人のやうに飲んで、大人の職工等にやんやと喜ばれたのである。「十六歳までは、何でも彼でも盗んでは痛飲して居たが、十六から上になると、仕事を利用して、巧く盗みをし、皆酒に流してしまつた」と、彼は言ふて居る。

少年時代に奈何盗みをしたか、それは敢て問ふ必要が無い。只周圍から受けた感化によつて、盗むことは伶俐いことであると考へてゐた。其間に少しも道德的の感じは無かつた。免も角も金を手に入れて、飲んで仕舞へばよいのであつた。然るに十六歳に達して丁稚の年期を了はり、定まつた給料を與へられる様になつた頃からは、盗むにも多少の分別を用ゐた。それは鉛板工の地位を利用して盗みをやつたのである。

鉛板工の常に用ゐるもので、特別によく賣れるものがある。それは鉛板で、鉛板工の通語では「鳩」とも云ひ、時には「青」とも云はれてゐる。鉛板工が毎日の様に定つてやる一つの仕事は、この鉛板を盗んで、其夜の酒代に餘る程儲けることで、それは昔ばかりでなく今日でも行はれてゐる事だ。此の「圖星」又は「拂ひ」を運ぶことの出来ない男、即ち腰帶から垂るして、浮袴の下に、大凡十三貫五百目の鉛板を運ぶ事出来ない男は、一人前の鉛板工と見られなかつた。此れは決して容易の仕事ではない。「青」を盗むの丈けでもそうだが、その上巧く洋袴の下に潜ませるのは一仕事だ。況んやそれを見付からないやうに持運び、假令滑つて落ちかゝつても、平氣で聲

を立てないでゐるのは、仲々豪膽な業である。而も「鉛板工」は、十六歳にしてこの仕事の達人になりましたのである。

此の種の竊盜が、如何なる程度まで行はれてゐるか、一例を擧げて見よう。ハイド公園の側に、ある有名な銀行の支店が建てられた時の事である。「鉛板工」も其工事に關つた多くの玄人泥棒の一人であつた。刑事が特別に傭はれて、其工事場で彼等を監視し、若し舉動不審な男があれば、其後を從けることになつてゐた。其の請負工事の品目中には、屋根を葺く鉛板七噸が含まれて居た。然るに、職工長と刑事が見張り、其他種々の用心がしてあつたに不拘、用ゐられた鉛板は僅か二噸半で、其他は悉く盜まれ、而も一人も捕らなかつたのである。

吾「鉛板工」は、幾度となく十貫目もある鉛板を腰帶に垂し、洋袴の下に隠しては長い楮子段を降り、煙草を吹かしながら、正直な英國労働者の爲るやうに、道具囊を肩に掛け、刑事が疑をかけたならそれまでと心の臍を固め、悠々と出入の居酒屋に行つたのである。

此の盜んだ鉛板は、彼等の所謂「沙店」に運ばれた。「沙店」とはよく云つたもので、遺線（遺線）の早い意味である。それらの店は、鉛板泥棒に熟知せられてゐて、贓品を時價で買取るのである。「鳩」の市價を知らない鉛板工はロンドンに一人も居ない。あらゆる居酒屋で、必ず話題に登るので皆知つてゐる。ロンドン市中にある「沙店」の名簿を公表したら、一般の人を驚かすに足るであらう。

「鉛板工」が始めて仕事に行つた時、「不思議な運」で助かつた事がある。それはストランドに近い、九十呎の建物の屋根を葺く仕事であつた。その日梯子段を登り盡すと、仕事を爲てゐる連中が、「麥酒オー」と叫べど教へて呉れた。そして仲間入りの印に麥酒を奢るのだといふ。しかるにロンドンつ子の「鉛板工」は、青二才と見られたのが癢に觸つて、故と「否だえッ」とやり返した。「否だあ、否なのか？」

「否だえッ、死んだつておごるもんかッ。」

忽ち大勢が彼を取巻いて、羽交縮にしたうへ、兩腕を縛り上げて、屋根から垂り下した。壁にぶつ付けく三四十尺も下して中空にぶら下げた。「これでも否だどぬかす

かッ」と上から罵る。さすがの彼も遂に我を折つた。然るに、翌日、其同じ繩で、少し許りの鉛板を吊り上げようとした時、六十呎の高さから、ぶつツリ切斷れてしまつた！

十八歳の時、大酒で随分遣ひ果しては居つたが、未だ自分獨立で、小商賣を始める位の金銭はあつた。又生來人好のする愉快な男であつたから、相當の眷顧客も持つてゐた。然し其時は、もう酒に浸り切つてゐた。酔つばらつたまゝ、九十段もある梯子の頂で、身體をくゞりつけもしないで、仕事をしたり、八十呎以上もある高空に架つてゐる鐵桁を、釘だらけの靴で渡つたりしゐた。それも時偶ならばまだしも、常の事であつた。

何か稼ぎの有り相な處でなければ決して仕事に行かない。そして盗んで儲けた金は悉く飲んで流してしまつた。彼の云ふ處によると、鉛板工の道具袋の中には、博物館好きの老人共を驚かす程の物がは入つてゐたこのことであつた。

是等は以前の話であるが、何卒今日は、此惡風が止んで、鉛職に關する大勢の者が、さらでだに小さくない犯罪階級の統計を、更に大きくする様なことのない事を願ふのである。

或日のこと彼は、ウエールス人の家に、瓦斯の漏れるのを見に遣られた。一人の朋輩と一緒に歩いて、幸漏口を見付け出しはしたが、それは壁板の裏に隠れた處だから仕事に一寸手間取つた。其折に、ハバナの葉巻一箱が座敷に置かれてあるのに眼をつけた。何で見逃そうか、突如、道具袋に押し込むと、其の瞬間主人がやつて來た。

「何處か見付かつたかね。」

「エ、旦那、見付かりやした。随分非道い處で。」

「左様か、大きに御苦勞だつた。こゝに五十錢置くよ。」

「さうですか、こりや難有うがす。」

「何喰はぬ顔で、正直な立派な英國労働者二人が出て行きやした。常もその通りでさア。そして、一度だつて耻かしい事だとは思ひやせんでした」と、彼はその時のことを述懐して言ふのであつた。

「容易く儲けた金銭は、容易く消費はれる」と、さも感じたらしく「鉛板工」は金言を引いたが、彼のは、酒で消費したのである。この如にして毎週數十圓を得ながら、或時は土曜日の午後、晩酌の爲めに、商買道具を質入れしなければならない事もあつた。

「あんな事で作へる遊び仲間と云つたら、お話になつたものではないですよ。私の仲間が、『貴公の道具を質に入れろよ、オイ心配するねエ、見棄てるもんか、後で出してやらあネ』と云つたのは、一度や二度じゃありやせん。そして飲んでしまつてから金につまつて、助けて呉と云つて行くと。『貴全が勝手に出したら可いちやねえか、貴公が入れたんだから、貴公が出すまでだ』との挨拶でさあ。其間に、飢！ エ本當に飢に迫つて來ても、一人だつて、パンの皮一片與れた事はありませんや。」

未だ廿歳に満たないで結婚をしたが、間もなく、此度生れる子が男の子であつたら、お祝に大いに飲まうと誓つた。而も辛棒し切れないで、生れる三月前に、既う祝酒を飲み始めて、それから七年間と云ふもの、大酒飲で通したのである。それで、どの仕

事もどの仕事も、皆失つてしまつた。ある家では、地下室に大の字なりに仰向いて、樽の呑口から迸り出る酒を、顔中に浴びて居る所を見つけられた。それも一度ならず二度までもだから呆れてしまふ。性質は追々癡狂になつた。力は強く、拳固は早く、鐵拳を揮つて闘ふことも度重つた。或日の如きは、小言を云つたと云ふので、職工長を窓から抛り出した事すらある。始終喧嘩の絶間がなく、遂には自營の内職も出來なくなり、仕事を探して放浪する身となり果てた。

「鉛板工」は、幼少の時から酒と泥棒との中に育て上げられて、道徳のいろはも教はつた事はなく、只敏捷い事、狡猾な事、不正直を賢く行ふ事ばかり習ひ覺えた。持つて生れた滑稽味と、快活な氣質丈は、鄙しい下劣な生活の間にも、失はないでゐたものゝ、矢張自分の家を破産させてしまひ、その上家族の者等を虐待するやうな暴漢となつてしまつた。飢えた子供等は、常に笞打の下に苦しんだ。その中の小さい女の子が、著者が訪ねて行つた時、父親に一寸賢しい笑みを見せながら、「お父さんの革帯の緋金で打かれたわネ、幾度も怖かつたり、ほんとに」と言ふて居た。飢ゑた

子供を捕へて、餘り管打つたり、足蹴にしたりするものだから、父親の足音が階段の方に聞えること、皆が大急ぎで寢臺の下に隠れるのであつた。然し細君は、仲々彼に反抗した。格闘を始める。勿論男が勝つて、女が打ちのめされ、半分氣絶してゐるのを尻眼にかけて出て行くというのが落であつた。それでも細君は屈して居ない。大いに罵詈する。夫が歸る度毎に、口を極めて、その野卑な心、殘忍な所作を罵り、泥酔した様を責め立てる。或る日の如きは、その罵詈があまり嚴しいので、彼は憤怒の餘り、妻を捕へて二階から階段の下に投げ付け、其後から飛び降りさま、頭を目がけて打ち据ゑた。そのとたんに過つて欄干をたゞき割り、自分の手頭に一生涯消えない程の傷を負うた。一方その時打たれた妻は、暫くは氣絶して居たのであつた。

追々と彼は、其處ら中、何でも手當り次第の物を賣り飛ばし、益々酒を煽る様になつた。その爲に家財道具は勿論のこと、仕事道具も、子供等の衣類迄も、ありとあらゆる物が皆失くなつた。

酒のために彼はもう、殆んど眞底まで墮ちて行つた。居酒屋の外には、妻が子を連

れて、良人の出て來るのを待つと云ふ處まで墮落した。父親は酒場で金を酒に換へて居る。戶外では血を分けた子供等が、飢に泣き叫んで居るといふ始末。而も少しも悔恨の情に惱まされるとか、良心の苛責を受けるとかいうことはなかつた。彼はどうでもかうでも酒を飲んだ。彼にとつては飲んでゐるさへすれば天下泰平であつた。

或る日は、昔の墮落友達で、少年時代に親しくして居た男が、救世軍の小隊に加はつたと云ふ報告を耳にした。しかし彼にとつて、そんな事は馬耳東風であつた。仕事をしながらでも飲んでゐる。仕事が濟めば直ぐに居酒屋に這入る。時には仲間のお慰みに、嘲弄的に説教を眞似たり、道化歌を唱ふたりする。店を閉う頃になつて漸く立ち上つて居酒屋を出で、眞暗な寒い雨の夜中を、嬰兒を抱いて立ちつくして居た細君に伴はれて歸るのであつた。

或る日の事、出入の居酒屋で例の如くに傾けてゐると、細君が戸を開けて入つて來た。

「出ておいでよ、でなきや、お錢をお呉れよ、子供に食はせるんだからさ。」と、細君が呼びかけた。

男は知らぬ顔をしてゐる。女はその顔を見詰めて待つてゐる。側には亭主や給仕が面白半分に眺めてゐる。仕方が無いから戸口まで後戻した。處へ一人の酒飲仲間が、「己れなんざア、年増女に追つかけられるなんて嫌なこつた」と當て摺る。「鉛板工」は顔を舉げて、振り返つたかと思つと、犬の如に叫んで、「其處を出て行けッ」と云ふ權幕。

女もさる者、お前が出て行くまでは妾も出ないと云ふ。

「出て行かんかッ。」

酒の壇を置いて、呪ひ呼はつたが、ヒヨロ／＼二三歩大股に近よりざま、妻を見かけ、釘だらけの長靴を蹴り出した。幸ひ敏速く身を交したので、重傷だけは免れた。

然し業を煮した夫は、自分の家の戸口迄も妻を追つかけて、

「チエツ、文句抜かすねイ、餘計なお世話だッ、俺が……」と叫び、神の名を濫用して、呪咀や、脅し文句の有りつ丈けを列べた。暫く黙つてゐたかと思つと、こんどは聲を落して、

「おい禁酒の誓約書を書かうか」

と云ふ。

「フン、お前さん幾度記名したんだか。そして、皆んな酒で、濕してしまつてさ」と細君が嘲る。

不思議にも此の言葉が彼の胸を打つた。其の時どんな泉が心に湧たのやら、それは言ふことも出来なければ、又推測することも出来ない。否彼の過去つた経歴から考へれば、そんな事が問題に爲らうとも思はれない。然しとに角、この細君の嘲罵が、非常に彼の胸に當つたのである。彼は居酒屋にも引返さず、宅にも這入らず、夢見る人の如く茫然として、其處を起ち去つた。理もなく、只立ち去らざるを得なかつたのである。不圖救世軍會館の前を通りかかると、突如、關節々々が硬くなり、兩脚は地に根を下したかのやうになつた。此の酔つばらいは、全く動けなくなり、茫つとして、爲す處を知らず、靜肅に夢遊病者の如く立ち盡した。

そしてゐるうちに、救世軍に入つてゐる舊友の事を思ひ起した。奈何して思ひ出し

たのか解らないけれども、兎に角念頭に浮んだ。是非逢て見度と云ふ氣が明白起ると、不思議や、今迄硬くなつてゐた四肢が急に緩んだ。そこで彼は、進んで會館の石段を登つて行つた。其時會館に居合せたのは、女士官許りであつたから、泥酔漢がやつて來るのを見て、怖氣付き、入口の戸を閉してしまつた。彼は人殺に見えたのである。

「怖がらんでもようがすよ、あの某が住まつてる處をちよつくら訊かせて貰ひたいんで」

と舊友の住所を尋ねた。士官等は戸の中から其處を教へてやつた。

訪ねて行つて見ると丁度在宅であつた。

「チャーリイ、俺も、こんな事はもう止め度い。だが出来るかな。」

「一人では駄目だ。」

「ぢや如何したら可いんだ、後生だから教へて呉れ。」

「本當か、お前の云つてる事は、本氣なのか？」

「どうも、一生懸命だ。」

「さうか、それぢや、その通りを直ぐに神様に申上げるんだ。今直ぐ、膝を屈げなさい、祈るんだ。」

「鉛板工」は跪いた。そして始めての祈りを捧げたのである。

起き上つた時には眼はくらみ、頭亂れ、體は慄へてゐた。恰も木の葉の如く戦慄してゐた。

「今夜集會に來なさい。そして悔改の座に出て、皆に聞えるやうに、從來のことが残念だ。これから新生涯には入り度いが、到底自分一人では出來ぬと云ふ事を云うんだ。奈何だネ、如何な感じだね？」と友は親切に言つた。

「胸が跳つてる」と、「鉛板工」は答へた。そして一人で街に出た。彼は心の中に、一大變化の起つたことに氣が付て、外の世界までも變つて見えた。心樂しければ、世の中も亦嬉しそふに思はれる。舗道は火の如く輝き、遠くの方は光明の靄で包まれ、並木の綠葉は、一齊に揺れて、恰も歓迎するものゝ如く見えた。苦しい夢魔におそは

れてゐた者が、楽しい夢幻の中に入つた様である。氣がついて見れば、或物が自分の身から抜け出で、これまであれ程追ひ求めて居たものが、少しも欲しくなくなつたことを知つた。そして其の後に、光が、泳ぎつ、舞ひつ、居を定めて居るのを感じた。喜び餘つてもう叫ばん許りで、此の天來の幸福が失はれはしないかと、考へる丈でも心怯ゆるのであつた。彼は酔つたまゝ、輝く光に照らされて、喜び揺ぐ木葉の下を、火の鋪道を辿る思ひで、無上の歡喜に前後も忘れて行つたのである。

其夜約束を守つて、救世軍の集會に出席し、公けの告白をして立ち上つた時には、新に生れたりとの感じは一層強められてゐた。

其の翌朝は、生れて始めて、酒が飲みたい、葺が欲しいの慾念に、苦しめられる事がなくて済んだ。しかし未だ野戦に出席して、世間の嘲笑を平氣で浴びる程の勇氣は出なかつた。それでも夕の集會には出席して、歸途、多くの居酒屋の前を通り過ても、一滴も飲み度いとは思はなかつた。

其の次の日、早速仕事に出掛たが、朋輩が如何なる態度に出るか、多少豫期して

ゐた。黙つて、眞直ぐに、大きな建物の工事中の部屋に入つて、仕事を始めた。

暫くすると戸が開いて、鉛板工兼泥棒の舊友が一群入つて來た。

「アルフ、お早う。」

「お早う。」

「渴かないか？」

「否や。」

「頭が重たくなつたらう？」

「なに。」

「一杯奈何だね。」

「要らねい。」

「えゝ？ 元氣付けに一杯やらんか？」

「要らねいよ。」

一寸黙つてゐたが、直ぐ問ひ掛けた。

「土曜日にチャリイを訪ねたんか？」

「アー、訪ねた。」

「そして救世軍に行つたんだらう？」

「左様サ」

「耶穌を信じたのか？」

「其通りだ。」

それを聞いた彼等は大笑した。

「何だつて？ 貴公は説教の真似をして、神様なんて有りやせんぞ、ほざいたじゃね

いか。止しねい、馬鹿な、そしてね、オイ、誰れも見ねい時に一人でお飲りよ。」

そう言ひ置いて、「鉛板工」の足下に麥酒一壇置いて出て行つたのである。

正午になつた時、彼等がまた這入つて來た。見れば麥酒は飲んでない。不思議に思

ひ、栓を調べ、入つてゐるのは水では無いかと管て見たが、何の異常もない。そこで

彼等は「鉛板工」に向つて、悪口、罵詈を加へ、恐ろしく神を嘲り、再生の人を無殘

に黽つた。随分非道い仕方ではあるが、然し考へて見ればそれも無理ではない。「鉛板工」に起つた變化は極めて急であつて、聖徒でよもなくしては、そんな罪の悔改が信じられるものではない。世間のどんな善い人だつて、放蕩息子の悔悛を疑うのだ。又失はれたる羊が、山よりも羊檻を慕ふ事を信じないのが通常である。

二三日は恚樣した迫害に苦しめられた。嘲笑られ、罵詈られ、冷評され、その上態々謀計んでまで凌辱を加へられて、殘忍に至らざるない有様であつたが、彼は天晴れ之を堪へ忍んだ。其週の終に、「搔入日」即ち附加金又は増給の渡る日が遣つて來た。之は居酒屋で渡されるので、「鉛板工」も皆と一緒に往つた。職工長を待つてゐる間も、一人が麥酒を押し付けければ、一人は救を茶化すといふ始末。漸く金を受取る時、惡友が側から、鉛板に對する債務が七圓有ると請求する。過去の罪惡を思へば、安い價である。云はるゝまゝに金を與へ、居酒屋を出て宅に歸つた。

這入つて見れば、其處は子供等を毆打した部屋である。餓死せんばかりの處を、妻の勞働によつて僅かに喰止められてゐた處である。あゝ悔悟してから始めて歸宅つ

て、彼の感慨はさうであつたらうか。妻や子供は、夫たり親たる人の身に、變化の起つた事を聞いてゐた。が多分、酔つた擧句に救世軍に加つたまでの事であらう。「播入日」には再た酔て來るに違ひないと思つて居た。誰もそれ程の奇蹟が起つたとは信じなかつた。

然るに今、仕事場から酒一杯飲まないで、歸つて來たのだから、一同驚いたのも無理はない。子供等は却て無氣味に思ひ、妻は只呆然として立つて居た。

「鉛板工」は妻の方に近寄つて、

「お錢が要るだらう、エ」

とやさしく云ひ乍ら、十圓金貨を手渡した。

呆氣に取られた細君は、夫の顔と自分の掌にある金貨とを視較べてるばかり。子供等は、怪訝な顔して互に目くばせし、呼吸を殺した。

無一物の部屋が暫くは、静寂としてゐた。その間、夫は感極まつて言葉が出ず、妻は呆れたまゝ、眼ばたさし、子供等は狼狽してゐた。

遂に父親が口を切つた。

「小僧共は、御馳走が食べ度いだらう、欲しいだらうな。一緒に行つて、肉でも買つて來ようぢやないか。」

妻はまだ、金貨と夫の顔とを見較べてる許り。

「お前が賛成なら行かう。」

彼女は眼を上げ、熟々夫を眺めて、

「お前さん、これや本當かへ？」

「本當だとも。」

やがて心も落付いて、難儀をかけた妻を抱き寄せ、之に心からの接吻をしてやつた。こんな事は、數年間絶えて無かつたことである。酔はないで、優しい心を持って歸つて呉れたのは、最初の子が生れて以來始めてあつた。長の月日の苦痛や、残忍しい打擲や、家を外にせられた困難や、飢餓、懊惱、貧窮、不幸、耻辱、失望などが、それからそれへと想ひ起され、それに較べて今俄かに愛情を注がれ、深切の手に抱か

れたことを知つては、氣を遠くしたのも無理はない。

あの苦しい、惱ましい過去は既に、眞に終りを告げたのであらうか。常も變らず殘忍な、飢餓と失望の日許りを送つて來たのだが、本當に是限り斷ち切られたのたらうか。

兎も角、其の日終日は、家庭に悦びが満ちてゐた。

翌朝早く、「鉛板工」は仕事に出掛けて行つた。今は嘲罵を浴せられないやいやうになつたけれども、此度は、六ヶ敷い、汚い仕事を、皆押し付けられたのである。然し心に樂しみの湧いた彼は、立腹もしないで、氣持よく、救世軍の軍歌を唱ひながらセツセと働いて居た。

「止しねい、そんな歌は。」

突然職工長が遣つて來て、理不盡にも彼を咎めた。

「それはまた奈何云ふ理で？」

「皆が嫌なんだ。己だつて好かない。」

「鉛板工」は黙つて仕事をした。

さうすると間も無く、隣りの方で働いてゐる連中が、一齊に唱ひ出した。而も其歌が思ひ切り淫猥なもので、美しい戀、宗教、道德に至るまで妙にもちつて、賤劣い、忌はしい意を臭はせたのだから堪らない。

「鉛板工」は、此の様は侮辱を受けて、黙つてるやうな男ではない。早速職工長の處に行つて、

「俺が救世軍の軍歌を唱ふのが悪いなら、奴等だつて、馬鹿な歌を唱ふていゝといふ法はないでせう。貴方は俺を止めたんだから、奴等をも止めて貰ひたい」

と、何處迄も主張して止まない。遂に皆が、彼を一人残して出て行つた。斯くて最後の迫害がやつて來た。彼は仲間から、全く除者にされたのである。誰一人話し掛ける者も無い、以前は親しい朋友同僚であつた人々の中に在りながら、彼は淋しく、無言で働いた。

彼の存在は、大人、子供の別なく、凡ての人から無視せられたのである。

曩日、ある佛蘭西人が私に話した。

「思ふに、救世軍が佛蘭西に來ても、英國で成功した程の事は到底不可能だらう。何故かならば、佛蘭西人は英國人よりも、ずつと他人の嘲弄を氣にするし、また世間の輿論に従ふから」と。

此の言葉から、「鉛板工」の事を考へて見る必要がある。そして彼が迫害の下に立つて、頑固に抵抗した勇氣と、男らしい堪忍とを見てやらなければならぬ。こんな職業に干與つてゐる以上、周囲の人と歩調を合はせて行くといふことは、絶対に必要な如く見える。然るに彼は、只一人立つて、多くの人々を相手にせねばならなかつた。況んやその相手たるや、彼が多年共に盗み、共に飲み、悪口をつき、戯言を弄した仲間ではないか。彼が其の時、宗教の爲に高められて、壓迫を加へられても意に止めない程であつたらうとか、彼の性質が粗大に出來てゐて、感じが鈍い處から、苦痛とは思はなかつたのだらうなどと早合點すべきでは無い。彼は立派なロンドン労働者として、自らの靈魂の爲に、眞に血みごろになつて、奮闘してゐたのである。始め突如として

彼の心から、舊い習慣を洗ひ去つたあの靈的自由の高潮は、既に退いて、今や通常の人力を勵まして闘はねばならなかつた。即ち一個の普通の人間として、その舊惡を知抜いてゐる人々の中に立ち、端正にして、悔るべからざる、聖い人間に變らんものと、努力しつゝあつたのである。そんなわけであつたから、彼等の仕打ちは實際骨身に應えた。それに何と言つても、友交際の可い、道化歌の好きな、酒場で陽氣に嬉戲の喜んだ「鉛板工」である。如何ばかり孤獨、絶交、疎隔の感に堪えなかつたことであらうか。

一兩日は除者の虐待を忍んだ。應て週の終りとなり、例の居酒屋で給料の殘額を受取つたが、其時、仕事は一二週間中止になつたので、次の月曜日からは、誰も不要いとの申渡しを受けた。

彼は宅に歸つた。

今折角、正しい生涯に足を踏み入れて、荒涼だ我家は、漸く住居らしくなり始めた許りのなのに俄かに糊口の道を奪はれては、途方に暮るゝより他は無。其日暮しの

労働者が、土曜日に、来週からは仕事が無いと云渡されては、たまの日曜日にも、休む心持にはなれない。あ、此重荷、鉛板の重量に勝ること幾倍ぞ。

然し妻には、仕事の無くなつた事は告げなかつた。彼は静に小さな聖書を繙いて、「我は葡萄の樹、汝等は其枝なり」と云ふ基督の語を讀んで、慰めを得た。基督を信じて、疑はないでゐれば、必ず萬事善くなるに相違ないと信じた。そこで日曜日は、一家樂しく過した。食物は充分だ、父親は眞面目である。お金も氣を付けて行けば、次の「擧入日」迄は大丈夫である。

月曜日の朝は、平常の通り早く起きて、仕事に出掛ける風を装ふて家を出た。街路に出ると、新しく働口を探す前に、何とはなしに、土曜日まで働いて居た處が見たくなつた。來て見れば、突然の中止とは少しおかしいと思つて居たが、案の通り、工事は相變らずで、仲間の者等は皆盛んに働いてゐる。そして道具を使ふ音が、景氣よく朝の空氣を揺がしてゐる。

「鉛板工」は、其處に突立つたまゝ、暫くは繁劇い光景を打眺め、耳馴れた音を聞き、知友を凝視めて居たが、遂には込み上げて來る憤激の情に堪えやらず、殆んど暴力に訴へようかとしたのである。しかし彼は、よくそれを忍耐で、凡ての人が敵であることを感じながら、其處を立ち去つた。

新生涯の首途に當つて、斯くの如く、世間が行途に立ち塞がつた。若し酔ふて卑劣の衣を附けたならば、俗な世間は途を開けて呉れたであらう。けれども、彼が信仰を固持し、正直にやり通そうとする以上、其の門を閉ぢて入れようとしなない。宗教に對する嫌惡の情は、種々な形で表はれるが、今善くならうとする労働者の、糊口の道を奪ひ去る位無情なものには他にあらうか？

今や「鉛板工」は、宗教に殉じて、己が魂に喰入る如き苦痛をどこまでも忍ばなければならぬ場合に立到つた。彼は到る處、自分の履歴がチャンと知られてゐる。ロンドン市中、鉛板工程、相互間に氣脈を通じてゐて、枝から枝へと遠くまで、極めて速く、凡ての事を傳へる職業は、先づ他には無いだらう。一寸何か、商賣上面白い話があると、忽ち大ロンドンの隅々まで、羽が生へた如に傳はつて行く。誰か仲間

の氣を害した者があると、其名は瞬く間にあらゆる鉛板職仲間^{鉛板職仲間}に知れ渡つて、未だ見た事も、聞いた事も無い人の處まで傳はるのである。そんなわけで此の憐れな「鉛板工」は、到る處^{到る處}働口^{働口}を得る事が出来なかつた。

彼は幾度か失望落膽^{失望落膽}に陥つた。けれども一度も、酒や葺^葺の誘惑は來なかつた。飢ゑてはゐるが、葺を燻らせて、癡醉^{癡醉}の樂を味ふとは思はない。人には拒まれ、望みは失せてゐるのだが、酒精^{酒精}の魔術^{魔術}を受けて、凡てを忘却^{忘却}しようとは欲はない。さりながら憂鬱^{憂鬱}の雪は、益^益闇くなり増つて、彼は幾度となく、「我は葡萄^{葡萄}の樹、汝等^{汝等}は其枝なり」との言葉を、心に繰返して、神の聖意^{聖意}に適^適ふ信仰^{信仰}を、呼び覺すのであつた。

著者は此の光景を、特に讀者の頭に、明瞭^{明瞭}に畫きたいと思ふ。職を失つた「鉛板工」が、朝五時に起きて、水一杯の他に、肉體^{肉體}にエネルギーを與へるものとしては何も攝らず、家を出で、終日漂^漂ひ歩く様なことが、幾日も續いた。時には、ロンドンの郊外^{郊外}ハロー・ワトフォールドの邊迄も歩いて行つた。永の一日を、只冷たい水を糧とし、信仰^{信仰}を杖として、脇目もふらずに歩いたのである。それでも時々、體は疲れ果て、胸は

痛む苦しさに、人目を憚りながら、哀れにも田舎道の真中に蹲まつて、

「オー神様、何卒、見棄てないで下さい」

と祈るのであつた。又足は曳摺り、肢體はぐだぐだになれば、道の側の溝に横はつて、衣囊^{衣囊}から聖書をとり出し、神は人間を加護^{加護}り給ふ、又一人々々を聖旨^{聖旨}に止め、その悲しみを癒し給う事を教へた基督の比喻^{比喻}を讀んで、自ら慰めるのであつた。何たる光景であらう。浮浪^{浮浪}を職業とする人間が、あまりに多い爲めに、眞に仕事を探してゐる立派な労働者も、見逃しにされるのが、今日の有様である、此の男丈^{男丈}でも何とかならないものであうか。墮落^{墮落}の生涯^{生涯}から、眞面目な生涯^{生涯}に改まつて、善人たらん爲に努力^{努力}してゐる彼ロンドンの労働者は、今田舎道の土埃^{土埃}の中に跪いて祈りをし、バツキンガムシャイヤの溝の中で、ガリラヤ人^{ガリラヤ人}耶穌の比喻^{比喻}を讀んでゐるのではないか。

家族は、母親の出精^{出精}によつて、漸く薄^薄い烟を立てゝゐた。それにしても飢餓^{飢餓}の鬼は、常住^{常住}戸口に迫つてゐる。いや父親自身は、前述^{前述}の通りもう飢餓^{飢餓}の状態にあつたのだ。身體^{身體}は絶食^{絶食}の結果、衰弱^{衰弱}その極に達し、意氣^{意氣}全く消沈^{消沈}しながらも、この飲酒^{飲酒}狂であ

つた男が、酒も葺も二つながら、少しも欲しく思はなかつたとは、科學の上から適當な解釋を下し得るのであらうか。

人が酒に誘はれる事があるとするならば、又人が酒を飲んでもよいものとすれば、毎日毎日、幾週間も幾ヶ月間も、街の辻や田舎道を漂浪して職を探し、而も凡て徒勞に歸した此哀れな飢ゑた男こそは、酒を欲し、また之を飲むとも咎めらるべき處は無かつたのである。

「鉛板工」自身の言によれば、其の當時、彼は決して宗教的興奮を感じては居なかつた。しかしながら、道をとぼく歩きながらも、讚美歌を唱つて自ら慰め、「我は葡萄の樹、汝等は其枝なり」との一句を繰返しては、神の御保護の確なる事を信じた。とは云ふものゝ、唱ふ心は必ずしも、愉快溢るゝと云ふ理に行かなかつた。困難に處して、呵々大笑する程の勇氣は無かつた。そして又恍惚たる樂しみが來つて、心も空になり、浮世生活を瑣末事として、軽く考へるだけの餘裕もなかつた。彼は、常に飢ゑながら職を求めてゐた。嘗ては彼を恐れて居た子供等を、今では此上もなく愛撫しながらも、

思ふにまかせぬ此の逆運を、心から悲まざるを得なかつた。彼が、家庭を春の如く幸福にしようとしてゐる熱心は、勿論天にも通じてゐた。家庭の爲には、朝から晩まで労働もしよう、金も貯めよう。もう二度と、一錢たりとも酒や、葺や、賭博等の爲めには空費しまいと決心してゐる。しかし悲しい哉、當座の急として職が與へられぬ。嗚呼、如斯は實に、近代文明に於ける幾百千の善人、數多の能力ある労働者の運命である。

遂に彼は、従來の高い給料の取れる鉛板工の職を、棄てなければならぬ事になつてしまつた。

此時、「飢 餓 軍」に入つて、職を得る事も出來たであらう。が然し、左様して救世軍の厄介になる事は、彼の好まない處であつた。多くの人々は、一錢の給與も受けないで、救世軍の爲に働いてゐる。職に有りつかんが爲めに、宗教を信じたと云はれ度く無い。彼はどこ迄も、自ら救はれたる宗教の名譽を重んじてゐたのである。高い給料を受け、面白い仕事を爲てゐた「鉛板工」は、遂に、人足の仲間に這入つ

て、鉛職を止めてしまつた、初めは随分苦しくはあつたが、然しまた其方に這入つて見れば、だん／＼愉快な事も出来て来た。

彼は、朝から晩までよく働き、得た金銭は少しも無駄には使はずに、その上、家庭の面倒もよく見る爲めに、今では、その日のことに困るといふことはめつたになく、幸福な、満足な、後悔の無い生涯を送つてゐる。彼は自らその家庭に就て、「昔妻の顔面に懸つてゐた畫が、今は壁に懸つてゐる」と言ふて居る。上の、娘は曾ては父親の足音を聞いた丈でも、恐れ惑ふたのであるが、今では毎日、父親を迎に行つて、一緒に歸るのが日課である。彼は今、一個の人足である。ロンドンの道路掃除人夫である。而も此上もなく幸福である。其顔は、テ・ダイヤモンドの讚詠の精神そのまゝを表はしてゐる。彼は限りなく神に感謝し、救の事に熱心で、宗教だけが、人をも國をも改良し得ることを確信し、喪はれた、不幸な人々の間に、大なる働を爲しつゝあるのである。而して夫の「拳闘家」が、出獄するや否やその足で、こんごこそは本當に殺してやるのだと決心し、それとは知らぬ妻を誘ひ出し、町を歩いて行く途中、救世軍の集會

に出席しようと思はしく、家を出かけた一人の救世軍人に、偶然にも出會して、一言話しかけられたのが原因で、遂に殺害の企てを翻し、愛と奉仕の生涯に入つたのであるが、その救世軍人こそ、實に此「鉛板工」であつたのだ。是眞にロンドン貧民窟に於ける宗教小説でなくて何であらうか。

酒と犯罪の中に育ち、竊盗と飲酒が抜くことの出来ない習癖となり、家庭にあつては、残忍、冷酷な親たりし此の「鉛板工」の如き者の心を、根本的に改めて、正直な、敬ふべき、純潔な心の市民に生れ更らしめる爲めに、社會は宗教以外に何の力を借り來る事が可能であらうか。回心の事實は、確かに心理學上の一研究問題である。而して、此の靈的奇蹟の深遠なる意義を、高調しない處の近世神學は、唯物主義の攻撃に對する、大切な武器を自ら失ふものと云はなければならぬ。回心が何であつても、その有形的機械が如何様であつても、その機械を運轉して、悪人を善人に化し、無用有害なる者を、社會有用の市民たらしむるものは宗教である。いや、宗教の外には何も無い。

茲に述べた「鉛板工」の物語は、僅なる頁に記されたものであるが、而も是によつて、政治家、社會學者等は、よくロンドンの怖るべき現狀に注意を拂ふばかりでなく、宗教にこそ、更生の大希望が存し、トルストイの全作品を通じて教へらるゝ如く、貴い後裔を得るの確證が存る事を知るに違ひない。宗教の外にこんな力を有するものは何も無い。

檻 樓 屋

此度の男は、ロンドン貧民窟で、私にその宗教的實驗に就て談つて呉れた人々の中でも、或點に於て、著しく特異な人物である。その回心の仕方が全く妙で、そこらの書物にあるやうな、通り一遍の話では無い。ゼームス博士著「宗教的經驗の諸相」の中にも、そうした例は見あたらない程である。

先づその容貌から描寫して見ると、彼は一見押入強盜然としてゐる。鼻は短平で、潰れかけた様な恰好をし、それに上唇が馬鹿に長く、口は唾み付きさうに振れてゐる。凸額の陰から薄色の鷺眼が怖ろしく光つて見える。辛慘を語る、深い皺の顯著な老顔は、汚れた亞麻布の如く、反抗心の頑強い、執念深い性情をよく表はし、半ば灰色で、半ば茶褐の監獄色をしてゐる。元氣旺盛で、暫くも静座として居ない。その身振は如何にも感情的である。何か唸り出す聲は、ロンドンの濃霧の如く重苦しい。笑ふ時でも眼は怖く、齒を露出した處は、猫の口そつくりである。眞面目な問題は、大嫌

で、食事最中でも、矢庭に鐵拳を固めて、夢中になつて食卓を敲き付け、反身になつて天井に向ひ、「榮光神に在れ」と呪う様なことをする。そんな時其顔は、皺で何か痛い處でもあるやうに引攀けて来る。

彼は不様で、不規律で、現金な男であつた。その爲めに損をした事位は、自分でもよく承知してゐた。

恐ろしく苦惱を味ひ、失望落膽の中にあつた時、奇蹟的に救出されて、今では、昔の神秘説を奉じた聖徒達にも劣らぬ位、正義の道に固く立つてゐると云ふ一事の外は、此の粗野にして、老いたる貧民窟子たる彼に就いて、誰れにもよく知られて居ない。又彼の意識に宿る秘なる思、その神觀、墓の向うに在る來世に關する觀念、それらが如何様であるか、我等の村度り得る處でない。

彼は、慘憺たる境遇の中に生ひ立つた。兩親共大酒飲で、財布は常も空であつた。それでも嬰兒の時は、母親の腕に抱かれて、「女王養育院」即ち「帝室養育院」に收容せられ、母の愛と國王の仁慈とを、兩つながら與へられて居たのである。しかし物心が

付いてからは、大抵居酒屋でのみ暮し、母の膝下に立つて、暗い人込の中の、洋袴や女袴の摺合う處に、零れた酒の臭を嗅がされて、始終息づまる思ひをさせられたのである。帳場が見える位脊丈が延びた頃には、既う往來に出て獨遊びが能きたので、居酒屋よりは外の方を好んで居た。以前から、夜半過て母と家路をさす事が、當り前のことゝなつて居たのだが、今は一人で戸外に母を待ち、待ち疲れては、こつそり庭や石段に這つて行つて寝込むのであつた。彼にとつて、街頭は少しも恐いものではなかつた。

テディーは慙した不注意な、悲惨な生活を送つたが、不思議にも不活潑にはならないで、敏い、快活な、伶俐な、滑稽な少年と成つた。食物は勝手に食ふ。父親の打擲をうまく免れては、裏庭の物置に逃げて行き、安樂に寝ると云ふ敏捷な小僧であつた。飽食して、元氣の好い樂しみをするには、歩兵聯隊には入るに限ると考へた等も、仲々伶俐な先生である。愈々入營したが、入營中差して手柄も無かつた代り、大した懲罰も受けないうで、無事平穩に勤めて居た。そして始終面白可笑しい男で通つて居た。

只其間に、追々酒の捕虜となつて行つた。而も頑丈な男であつたから、腹一ぱい注込んで、大抵平気で、たいした失敗もしなかつた。除隊した時は、一人前の大酒飲となつてはゐたが、泥酔漢とまではなつてゐなかつた。そこは如才の無い男である。その後古物商人、實は襦袢屋を初めたが、元より商法と云ふ程のものではない。然し、酒飲で、快活で、加之、話上手なのが評判で、可也の顧客も附いて來た。けれども、そうして儲けた金は、忽ちすつかり飲んで仕舞ふのであつた。其の後ある性質の善い細君を迎へたが、此の細君甚だ確り者で、よく夫を矯正めた。そこで萬事が改善される。夫は眞から妻を愛し、そのために居酒屋からは足を斷ち、男らしく克己する。一杯の麥酒も傾けず、一錢の金をも酒屋に棄てない週が度重なつて來る。かくして家庭は、貧民窟の家庭としては、實に幸福なものとなつた。

然るに突如、一大不幸に襲はれた。細君が死んだのである。彼は此の世界に、唯一人とり殘されて、淋しさに堪えないまゝに酒に走り、とうとう常習泥酔漢となつてしまつた。是迄は決して酒の奴隷とはならなかつた。強情な彼は、慾を制御するだけの

意地を持つて居たのであるが、今妻の死に會つて心亂れ、悶々の情に堪得えず、遂に酒に慰安を求めたのである。我々は、貧民に對する酒精の強大なる誘惑力を、熟知しなければならぬ。

酒に就て、ゼームス教授は次の如く言ふて居る。「平常正氣の時には、冷い事實や、そつけない批評の下に、埋没せられて居る人の性質の不思議な能力が、一度酒精のために刺戟されると、その支配力を發揮して、常識で考へ得る以上のことをなすのは疑ふべくもない。正氣の時には、物事を小さく見、判別し、又は否定もするが、酩酊する時は、物事を大きく見、おほまかに見、肯定し勝ちである。酒精は、人間の『然り』と答える性能を大いに鼓舞するもので、又、事物の冷い外面を忘れて、熱した内心を思はしめるのである。そんなわけで、其の人は一時眞理と一緒にゐる。酒を愛するのは、必ずしも邪惡一片の心からではない。貧にして、無學なる者にとつては、酒は實に、音樂或は文學の地位に立て、彼等を慰むるものである。由來人生には、深い神秘的な、悲劇的な點がある。それで多くの人々は、何か即座に、これは結構であると解る様な物

の閃光を経験し度い慾望を持つて居る。でその物を全體から見れば、墮落や中毒の憂目に導くものであつても、其初期の瞬間に、此の慾を満し得れば、それで構はないのである。酔つた時の意識は、神秘意識の一種である。そこで之に就て意見を述べるには、神秘意識全體から見て、議論を爲なければ當を得ない事になる。

亞酸化窒素（刺戟性の瓦斯體）とエーテル、其中でも特に亞酸化窒素は、空気を以て適當に稀薄にせらるゝ時は、非常に神秘意識を刺戟する。之を吸入した者は、眞理の奥の奥迄見通せるものらしい。而も一度正氣に復するや、此の眞理は忽に雲散霧消する。そして之を言葉に表はさうとすると、頗る無意味なものになる。乍然、何か深遠な意味のものが在つたと云ふ考が強く残る。多くの人は、此の亞酸化窒素で夢幻の境にあつた時に、形而上學的の啓示を受けた事を信じてゐる。私自身も數年前之を試みて、其結果を公表した事であるが、其當時一つの確實な結論に達し、その印象は、今日迄も依然として残つてゐる。其結論と云ふのは、我々が、普通合理意識と稱する平常覺醒せる時の意識は、意識の一形式に過ぎないのであつて、其周圍には、極

めて薄い隔ての帳を界にして、之とは全く異つた、陰れた意識形式が存在するといふ事である。そんなことには氣付かないで、一生を送る事もあらうが、一度適當な刺戟を與へらるゝならば、忽如、其處に完全に顯はれて來る。その明確した意識形式は、利用しようとするれば、利用するの途があるであらうと思はれる。此の從來無視せられた意識の形式を度外視しては、宇宙總體に關して、最後の斷案を下す事が能き無い。」

右の説は、特にくどくしく述べる迄も無く眞實である。然し、酒癖の人を救はうとしてゐる人々の多くは、其人が苦痛を免るべき唯一の途であると思つてゐる處のものを、無理に奪ひ、夢幻のうちに、せめても一切を忘れようとしてゐる手段を、たゞ退けるものたることを、自ら氣付かないのである。そして酩酊は丁度、學校の子供が、甘パンを食べ過ぎて胃痛を起すと一般、貪食であるかの様に心得てゐるのだから、あまりに理解が足りない過ぎる。故に折角の好意も無になるのである。

飲酒の心理學的方面は、甚だ不可思議に満ちてゐて、之をよく觀察する者には、人の魂の微妙なる處を覗かしむるのである。

此の粗暴漢の、除隊兵たる襤褸屋は、自分の眞實に愛してゐた婦人の死によつて、意氣が全く挫かれてしまひ、萬事を忘却する爲めに酒をあふつた。墓場を忘れる爲めに居酒屋に這入つた。寂びしい家を忘れる爲に飲仲間と故意に笑つた。傷つき流るゝ心の血を止めようとして、飲んで飲んで飲み通した。彼はかくして幸福を見出した。正氣の意識を取圍んでゐた薄帷は、功能顯著なる酒氣に觸れて、上に取り去られ、廣い榮々とした、歡樂い意識の野邊に住居した。彼が酩酊して、愉快を覺える様になつたのは注意すべき事である。同じ酒飲でも、ある者は恐ろしく眠氣を催し、麻酔劑にかゝつた如くなる。そして陰氣に無口になつて、ブツ／＼唸り出す。又別な組、即ち此のテディーの如き者に對しては、酒は魔神デンニ、又はイフリットの力を表はして、酩酊者を昇て忽ちに第七の天に到らしめ、星の世界に運び、一瞬間に班岩碧玉の宮殿を作り、其手には黄金を握らしめ、其魂には絶大な力を得たりその氣を吹き込むのである。テディーは悲哀の深みから、幸福の絶頂に登つた。酒はかの手品の風呂敷がするやうに、彼を中天に押し上げ、象牙造りの望遠鏡のやうに、何物でも見度いもの

を皆見せて呉れた。又魔術林檎の如に、凡ての病を癒して呉れた。彼は非常に陽氣になつて、ために甚く評判がよくなつた。悲惨な賤奴共は、享樂を求め、凡てを忘れようとして、彼の出入する居酒屋に集まつた。そして彼の御機嫌をどるが如く、彼が冗談を云へば、大騒ぎをやり、彼が歌へば囁し立てた。只もう酒に浸つて有頂天になり、テディーの愉快氣なのに和して無上に悦しがつて居た。彼のかうした有様が數年間も續いた。勿論商賣の方が拙くなつて、遂に失敗して仕舞ひ、最早家賃すら拂へなくなつた。敏捷な連中は、彼の顧客を奪つて行く。而も彼は、笑ひつ、唱ひつ、破滅へ進まうが奈何ならうがもう一切構はない。酒の魔法に掛つて居れば、何の襤褸がと云ふ勢ひである。その中に無宿者になつてしまひ、夜行の巡查に見付かりさへしなければ、どこでも轉げ込んだ處に寝てしまふ。庭だらうが、芥箱だらうが、犬小屋だらうが、又は穴倉だらうが、そんなことには頓着しない。

彼は種々輕業的な事をして、生活費、即ち酒代を得た。彼の顔はフラックスマンの畫いた惡魔よろしくであるが、一生他人に腹を立てられた事がなく、常に評判の好い男であつた。其の邊りでは誰れでも皆あのテディーを好かぬ者は無いと云つてゐる。此の男は、これで仲々賢い處がある。自分の靴の紐を取つて、まだなじみのない居酒屋に這入つて行き、ごうか買つて呉れと云ふのである。此の様にして金を貰へば、また明日の商賣のために靴紐を衣囊に入れて、寝込んでしまうのであつた。その眼はいつもキヨロ〜と、後庭や溝の中に、何か賣れ相なものでも落ちてゐないかと光つてゐる。そうして行商をやりながらも、決して犯罪丈はしなかつた。零落の極に沈んだある時の如き、古新聞を一枚見付けて、それを細長い片に裂き、「福の神」だと云つて一つ一錢に賣つたと云ふ。好人物のテディーは、如何なる時にも犯罪者にはなれなかつたのである。

然しながら、追々酒慾が嵩じるに従つて、それを満足させるだけの儲けを爲るのに、愈々益々困難を感じて來た。勢ひ陽氣にはかりはしてゐられなくなる。それに舊

い友達は、徐々彼の爲めに酒代を拂はなくなる。戯談を云つても相手にならないやうになる。加之に其衣物と云つたら、浮浪人の衣る全くのボロで、寄り付けたものではない。そも〜酒といふ奴は、イフリットの如なもので、人を喰物にして置いて、間が悪くなると逃げて仕舞ふ習慣がある。今や彼の陶酔の世界は消えて行き、宮殿は崩壊し、意識は三合徳利の中に萎縮して仕舞つた。

彼が此の様な窮乏の中にあつた某日のこと、一つの不思議な事件に巡り合ふ事となつた。久しく居酒屋の庭やら、其邊の便利な物の中で寢宿りした揚句、誰も世話をしない、泥まみれの壞れた荷車を見付けたが、風雨を凌ぐのに恰度良い。彼はこゝに腰を落ち付けて、自分の住家として居つた。處が其事が世間に知れて、皆、テディーの安宿に就いて大笑をした。彼は、夜一時或は二時頃庭に忍び込んで、荷車の上に這ひ登り、檣樓にくるまつた身を板の上に横へて曉まで熟睡するのであつた。

扱て或寒い夜の事、其日は可也儲けがあつたので、「八錢皮」即ち合宿所の寢臺を買ふことにした。時々、殊に酒で愉快になり、氣が高まつて居る時には、此れを奢るの

であつたが、特に其の夜は、意氣揚々として合宿所へと足を向けた。そして地下室の臺所に、燃てる火に温まり、汚れた敷布や穢い毛布や、我々ならば犬にでも衣せないやうな藁薄團にくるまつて、楽しく寝ることを思うては、すつかりほく／＼ものであつた。

心も軽く行く途中、其の近邊でオールド・バンプスと稱はれてゐる、哀れな浮浪老人に出會した。此の男、テディーを見るや泣聲で、寒くて寒くて、氣分が悪いことを訴へ、神様が何處かで一夜の宿を與へて被下ればいゝがと歎く。そこでテディーは、自分の荷車の在る事を教へて、一晩だけ宿る事を許してやつた。

テディーは、合宿所で安樂に休息し、翌朝、新しい希望を抱いて外に出た。不圖人に出逢ふと、顔色を變えんばかりに驚いて立ち止まつた。

「如何したんだ」とテディーが訊く。

「貴様は死んでるんじや無いか」との答。

「俺が死んだッ、何を云つてるんだよ。」

「貴様は眞實生きてるのか、エツ。だつて、オイ、近所の人達は皆、貴様の屍を見たよ云つてるぜ。貴様は、昨晚車の中で死んだ筈だ。そして皆が、貴様の體を車で運んで行きよつたよ。」

一夜の宿を借りたオールド・バンプスが、そこで寝たまゝ死んだのである。誰れかがそれを見出して大騒ぎとなり、やがて巡查もやつて來た。群衆は、屍が荷車から取り出されて、運搬車に移され、埋葬場に送られるのを見て、「テディーが死んだ」との評判を立てたのである。

自分が死んだと思はれたと云ふ事は、テディーに非常な感動を與へた。それは恰も、警告の輪轉火花が火花を散らし、混亂を残して行つたかの如くであつた。テディーは立ち直つて、死の問題を考へざるを得なかつた。人間には魂が體から離れて行き、生前にその人が爲した事を、報告せねばならぬ時が必ず來る。殊に自分には忽然やつて來るかも知れぬ。實際少しの機運で、オールド・バンプスの屍は、自分のであつたかも知れない。自分だつても、寝てる間に、斃れて仕舞はぬとも限らぬ。そして冷く、

硬く、動かないやうになつて、車から取出されるであらう。人々は「テディーが死んだ、犬のやうに死んだ」と罵るだらう。が自分の魂は奈何したものであらうか。「人を驅つて、犯罪をも敢てせしむる程の戀にあらざれば、眞の戀にあらす」とパーゼーが云つて居るが、之と同じく「情も亦、人をして罪を犯さしむる程のもので無ければ、眞の情にあらす」と云ひ得る。」(シーゲル著宗派心理學百三十六頁)

此點に付てゼームス教授も言ふて居る。
換言すれば、大なる情熱は、「良心」によつて設けられた普通の意味の制限を廢棄する。反之、此の世にある凡ての詐偽者、卑劣漢、情慾の強い者、残忍な者、その他多くの犯罪者の中、一人として、その犯罪的衝動が、或時機に於ては、其人の性質を支配し得べき他の情緒によつて制へ付けられない者は無い。但し此の場合、其の情緒が充分強いものでなければならぬのは云ふ迄もない。特に恐怖心は、此の犯罪階級の人々に、右の結果を及ぼす最も有効な情緒である。彼等に執つてそれは、良心の効用をなすものであつて、其點から云へば、恐怖心を『高等感情』の中に入れてもよいの

である。若し我等が直ぐに死ぬるとか、最後の大審判の日が、目前に差迫つたと云ふことになれば、我等は急いで、自分の道徳の家を整理するに相違ない。そして罪惡の誘を受けるやうな事は決してあるまい。昔流儀の地獄の刑罰を説く基督教は、人を恐怖せしめる事によつて、悔悟に等しい行を爲さしめ、眞の回心と、其價を争ふ如き良結果を齎し得る事をよく知つてゐたのである。」

右の如く非常に有効な作用を持つて居る情緒、恐怖心が、此のロンドンの賤奴の心に働き始めたのである。奈何したらよからうかと、彼は感つた。第一現在の生涯から逃げ出さなくてはならぬ。あの荷車でもう寝る事は出來ない。もうあの古巢へ行つては可けない。さしづめロンドンを逃げ出るのが上策だ。そして何處か仕事を探し出して、如何にかして、やり返さなくつては駄目だ。

そこで、慄へ上つた泥醉漢は、貧民窟の軒下に生ひ立つて、四十の坂を越した身をして、自分の魂を救ふために、ロンドンを後に漂ひ出でたのである。
此の襤褸屋テディーは、すつかり風雨に曝され、浮世の辛慘にやつれ切つてしまつ

た顔を著者に向けて、浮浪生活の恐ろしさを語つて呉れた。膝が棒の如く硬く、足が疼く様に熱り、空腹い胃の腑は餓鬼のやうに食を求め。何處を訪ねても戸は閉ざされる。男からは怖ろしい嘲弄の眼を以て見下げられ、女子供からは、驚いた卑下の目を以て視られながら、流浪して行く。焼くが如き炎天の下も、篠衝く雨も避けられぬ。氷雪に打たれて、血も凍る寒さに震え、深い霧に閉ぢ込められて泣く時も、あちらの野邊、こちらの馬小屋と到る處で、犬に吠え付かれ、村の巡査に後を尾られ、深切な言葉一つ掛けられず、何一つ與へて貰えるではなく、たゞ疑ひの眼をもつて見らるゝばかり、その上ごんなつらい、又賤しい仕事もさせて呉れる者も無い。如斯經驗をして、心が頑固になり、血は酢の如くわき立ち、同胞を仇敵の如く思ふに至るは、蓋し當然のことである。

巡り巡つて養育院に這入込んだが、何の利益にもならなかつた。彼の魂を救はうとするではなし、深切を盡して、その心を人間並にして遣らうともしない。誰一人彼を矯正して、男らしい職業を與へ、収入を得て家庭を持ち、自尊心ある男として遣る者

が無い。養育院に入るや否や、始から犯罪者として取扱はれるのだから堪らない。床に就く迄無情な言葉で話しかけられ、常に冷い目で見られて居る。その上、此の哀れな、飢餓に迫つて居る浮浪人は、朝飯前に半噸の石割をさせられたのである。彼は幾度となく、漂ひ行く途すがら、神にも人にも見捨てられ、何か頑として動かない悪鬼に導かれて、益々悲痛を覚え、懼るべき地獄へと引き落されるやうに思つた。幾度も望を失ひ、全く暗闇に生きながら、地獄怖ろしさの情から漸く自殺を思ひ止まつたのである。而して恒に、焦れる程の酒慾の爲めに苦しめられて居た。

彼は一つの面白い話をした。或日サリスベリイ平原を横切つて居た時のこと、飢えと疲れに身體をもてあまし、とある溝の中に落ち込んだ。そして両手で顔を被ふて、子供の如く泣き乍ち「神様、何か食物を被下い」と云つて叫んだ。すると不思議に、其失望落膽の中にも、助けが與へられたやうに感じた。手を顔からはなして、左右を見廻はしたが誰も居ない。しかし真正面の向ふの籬に、紙包みがある。やれ何か有るわいと思つて、起き上つて見ると、それは袋で、中には二個の菓子が入つてゐた。

うまく符合したものである。

テディーは遂にロンドンに舞ひ戻つた。田舎の百姓共は、自分を犯罪者の如く取扱つたが、自分を知つてゐる人達は、或は助けて呉れるであらうと思つたからである。彼が元の古巢に歸つて來た時の風と云つたら、俗に「呼子鳥の如に忌はしい」と云ふ程に汚ならしく、誰れも彼も背を向て逃ける始末であつた。それでも奈何にか恁にかして、彼處や此處で、酒を貰ひ飲みした。時には下水から何か拾ひ上げ、それを賣つては飲んで居た。或は馬の口を持つて居て、其駄賃に銅錢を恵まれた事もある。二度は、夫の「拳闘家」が未だ虚榮に誇つて、上等酒場で痛飲し居る間、その馬の番をした事もある。恁様にして幾ヶ月も幾ヶ月も、常に飢い思ひに苦しめられ、時には酒にありついて、ホロ酔機嫌のこともあるが、だんくく嫌な人間に成り下つて行つた。そして遂には同じ仲間の者までが、彼から遠ざかるに至つたのである。

某日、一錢も然い。而も酒が飲み度つて到底堪えられぬ。どうしても飲まなければ承知が出来なくなつた。將に犯罪に足を踏み入れる處である。處で食をあさる獸の如

く、身を屈めて小走りに街を漂ひ、怖ろしい眼を見張つて、金を得、酒を飲む機会もがなと窺つた。幸にも、彼が酒の爲に、數百圓を費消した居酒屋の亭主が、戸口で人と話してゐる。テディーは汚れた襦袢のまゝ、ツカ／＼と其男の處に行つて、「麥酒を一本、明朝まで貸して呉れないか。」と頼んだ。

亭主は苦り切つた顔で、彼を見下して、

「己が、旦那と話してゐるのが解らないのかツ」と言ふ。

然しテディーの酒飲み度さは、如何なる罵詈雑言を受けても仲々萎靡ない。

「後生だ、明朝までだ、飲まなきや死ぬよ。」

亭主は黙つてゐる。

再た強請る。地獄にでも行けど罵る。

「左様云はないで、後生だから一杯、たつた一杯で可いんだ。さうすりや黙つて行

くよ。」

「馬鹿ッ、救世軍にでも行つて、恵んで貰へッ」
と、亭主は怒號する。

丁度其の時、次の街に、救世軍の野外傳道があつて、樂隊の音が聞えてゐたのである。

「本氣で云ふんかエ、まさか？」

と、テディーが云ふ。

「本氣よ、救世軍にでも行つて恵んで貰いねエ」と亭主が繰返す。

茲で一寸話して置かなくてはならないのは、多分あまり知られて居ないと思ふが、ロンドンの貧賤な邊では、居酒屋の亭主が屢救世軍に寄附して、極悪の泥酔漢を救ひ出すやうに慇懃する。救世軍はいつでも酒店に入り込む事が能る。居酒屋の亭主は、大酒飲からは、何の利益も得られない。悪く、習慣的に泥酔するやうになると、彼等を嫌ひ出す。騒動を始めたり、警官と悶着を起したりするからである。亭主の好なのは、

十銭か、十五銭のウイスキーをやり、その上、煙草代に八銭も拂うといふ、ウエールス人の様な男である。そこには確實な利益が存る。ウエールス人は飲んで、葉巻に火を點けて、次の人が入れるやうに出て行つて仁舞ふ。然るに麥酒漬の人間と來ては、十銭許り飲んで、腰を据ゑたまゝ、數時間も動かない。來もしない仲間に、一杯奢つて貰う氣で居るのだから始末が付かぬ。亭主共は救世軍を援助するが、元より損は爲ない理になる。以上はある救世軍人から、直接聞いた話である。

其處で、此亭主がテディーに、救世軍にでも行つて恵んで貰へと云つたのは本氣で云つたのである。彼は恐らく、テディーの魂の救の事は、何とも思はかつたらうが、自分の店のお客として、來て貰ふのがいやであつたのだ。亭主の立場から見れば、何れにせよ落ちる處は同一である。

其言葉の中に含まれた輕蔑の意味が、甚くテディーの心を刺した。此れ迄、如何程の金を此店に注込んでやつたらう。自分が文なしになつて襤褸を下げ、代りに彼が富んだのも皆そのお蔭である。然るに今只一杯の酒を狂するばかりに求めて居る時に、

夫の鬼めは、犬にでも命するが如く、出て行くと怒號つたのである。「救世軍にでも行って惠んで貰へ」この語は、實際に刻み付けられた。と不意に、此救世軍こそ、自分の様な汚い浮浪人にでも、深切であると言ふ考が、心に浮んで來た。恰も光に照らされたやうであつた。彼は亭主に拒まれて、基督の事を思ふたのである。貧民窟の居酒屋の戸外の舗道で、此の酒飲みたさに心狂ひ、悲惨の極に沈んでゐた浮浪人の意識に、突如として、基督は喪はれたる者に深切である、その考が起つたのである。

私が始めに云つた如く、回心の記録中に、このやうなのは未曾有である。神秘家の恍惚たる幻しとは大いに異ふ。又悔悟した人の祈つてゐる魂に、忽然照り亘る光輝とも似てゐない。更に又、鬱々として居る魂を、神の愛へと呼び覺すところの、あの神秘的な聲とは随分違ふ。而も一つの異例でありながら、如何にも自然で、如實で、單純ではないか。而して又、如何にも貧民窟に適合しいではないか。

「イヤ大將、本當だ。」テデューはいかにも亂暴に言ひ放つた。ちつとも悔悟し居る人の聲音ではない。「その中にチップを持つて來るよ」と云ひさま、汚いポロを下げて

其處を立ち去つた。

テデューは眞直ぐに、次の街に開かれてゐる野戦の集會に行つた。今や樂隊が、會館の方に歸り仕度をしてゐる。テデューはいきなり、鼓手の處に來て、一緒にいつてもよいかと訊ねた。「宜しい」と云はれて、其男の側について會館迄やつて來た。が途途、太鼓の響や、喇叭の音が、妙に心の緒琴に觸れた。會館の集會では、心が全く碎かれ、過去の生涯を省みては、神の仁慈を拒否した事の多きを思ふて、悔恨の情に胸は塞がった。悔改の座に進み出て跪き、心も狂うばかりに赦しを乞ひ、新しい生涯に旅立つために必要な力を求めた。

「オー神様、オー神様、俺は生れ更り度いのです」と繰り返して叫んだ。その中に應答が來た。即時に、即座に、胸は廣く、魂は軽く、血は湧き立つて血管を走るのを感じた。彼は全く救はれたのである。

思へ、此男は僅十分間前には、酒に狂ふて街路を走つてゐたことを。救世軍の人達は彼を愛し、深切を盡した。しかし彼の風態は、實に恐ろしいもので、

其の小隊が取扱つた人間中、彼程汚れてゐた者は一人もなかつた。靴下もシャツも着てゐない。黒く汚れた足には、ポロ／＼の破れ靴を直かにはき、膝の邊りには、これまた直かに、裂け綻びて、お話にならない洋袴をぶらさげてゐる。哀れな體には上衣と云へば云へるが、何とも理の解らないものが引つ掛かつてゐる。靴下もシャツも胴衣も無い。その皮膚の有様は、記そうにも形容の言葉がない。第一に古上衣を買つて遣らなければならなかつた。早速彼の商賣たる、襦袢屋に御用があると云ふ始末。吾等の住む現代に於て、人間が此の様な状態に陥る事もあるのだ。酒は斯く迄に人を引摺り落すこともあるのである。かくしても國家は、是を放任して顧みない。しかし宗教は、此人を捕へて、居酒屋の亭主と、國家から救ひ出したのである。

人或ひは、是は單に、職業を得んが爲めに、救に入つたのであらう。備はれようが爲めに宗教に來り、慈悲で貰ふ給料で兎も角満足して、悔改の生涯を送つてゐるものであらう等との、疑ひを抱くかも知れない。

が、どうぞ、終り迄讀んで頂きたい。

回心して、會館を出た彼は、友一人にも、何事も告がないで、二夜の間街を漂ふた。救世軍は普通、回心者の世話をよく見るのであるが、テデイーの場合は、不圖した事からそれが無かつた。皆が、テデイーには誰れか、食はせてゐる者があると思つて居た。然し事實そんな者は無い。翌日救世軍では、彼を白馬に乗せて、彼の舊往來した邊りや、下賤な町を、喜び勇んで練歩き、テデイーの回心を告げ、人々に大なる感動を與へたのである。然し白馬の上の人間は飢ゑてゐた。が、何も云はなかつた。一言の吐きもなさず、一片のパンも一錢の金をも乞はなかつた。飢の痛苦を貴くも、黙つて忍んだのである、そして口の中で、「オー神様、何卒運を向けて下さい。一生お事へしますから」と祈つてゐた。私と談つた殆んど凡ての人々の如く、テデイーも、救世軍をだしにして、飯は食ふまいと決心して居た。彼は、救世軍が綽名を付けられて、「飢 餓 軍」と呼ばるゝのを名譽としてゐる。自分で自活の道を立てようと決心した程の彼であるから、それはえらい勢でいふのである。

「俺は麥酒や、施與や、職業が欲しくつて、救世軍に行きはしない。それはさうした

目的で救世軍に入つて、失望して出て来ては、「飢 餓 軍」だなんと悪口を言ふ者も澤山あるさ。だがその綽名は結構な事だ。救世軍はゴロツキや、無精者や、見せ掛け労働者等の爲に存在やせぬ。救世軍は、全能の神を求め、膝を屈して御許に行き、力を得て起ち上り、二度と再び食客をしたり、泣聲を立てたり、遊惰者とならない人の爲に存在した。俺の貰ふたのは即ち其力だ。難有い神様が、食客の狸々の俺を引き上げて、神様を愛し、確り立つ精神をお與へ下さつた。奈何して新生涯を始めたか御存じかネ、お話しませう。こんな事でした。某人が、俺に大枚八錢を惠んで呉れた。それが始めての所持金だつた。其の八錢で二つの小さな麥粉の布袋を買つて、それを解いて前掛を縫つた。其の前掛を一つ八錢に賣つて、前の八錢が十六錢になる。是が抑々の始めで、十六錢でまた袋を買ふ。そして賣つては儲け、儲けては後何かを買つて、お仕舞には一圓許の金にした。それが一日にやつた仕事だつた。そろ／＼商人らしくなつて来た。恁なにして數週間やつてる中に、可也のお金が貯まつて来た。そこで紳士然とロートン旅館(ロートン公の創設した、労働者

ホテル)に行つて宿つた。遂に再た襤褸屋を始め、儉約しながら精々と勵んだそのお蔭で、自分の家も借り入れて、まあ相當にやつて行けるやうになりやした。一錢だつて救世軍から貰ひはしませんや。」
 扱て茲で一つ懺悔物語になる。
 それはテディーが驚くべき悔改をして後、數ヶ月も立つてから、テディーが墮落した。再た飲み出したと云ふ評判が立つたのである。此の評判が忽ち天使中校の耳に入つた。(序でながら、此名を中校に付けた御本人はテディーである。)其の時丁度中校は、晝の働きに疲れて歸て来て、夜の集會をも控へてゐたのであるが、然し、報告が容易ならぬ事だ。テディーが墮落したと云ふ。テディーの魂が亡びるのだ。白馬の上の人間が落ちたのである。彼女は直様自轉車に飛び乗つて、下士官達の處に走つて行つた。そして數分の後には、全小隊が大活動を開始した。墮ちた星、失はれた羊たる彼即ち、自ら吐きだした物を再び喰ひに行つた犬を探し廻つたのである。今日でも時々、此の自轉車隊のテディー大搜索の話が出る程の大騒ぎであつた。

漸く居酒屋で発見したが、真に泥酔してゐた。彼の小綺麗な家に連れ歸つて見れば、家は打ち破られ、汚されてゐたが、兎も角床に就かせた。テディーが正氣付て見ると、誰れか、爐に火を點けて、茶を沸してゐる。そして小さい部屋に跪いて泣きながら祈つてゐる。それは天使中校ではないか。その優しい愛に觸れて、胸に釘打たるゝ思ひになつた。

何だつて墮落したのだ。彼は後になつてから語つた。「あの時一度墮落したのは、却て善かつたので、それ迄は、實はあまり自信が強過ぎて、自分の弱い事を思ふ謙遜な心が無く、自分の力では無い、神のみが泥酔漢を救う能力を持ち給ふといふ事を知らなかつた」と。然し其處には別に人爲の原因があつた。是に依つて、ロンドンの社會生活の一片が窺はれる。それはテディーにはお母さんがあつたが、養育院に居て、よく世話をせられ、行届いた規則によつて、酒を飲まないやうに保護せられてゐた。彼は回心後、毎日より、其の養育院に行つて母を伴ひ歸つては、夕食を御馳走し、五十錢銀貨を與へて、復無事に養育院迄送り返すのであつた。然し慇懃な孝行では近所の人

達が満足しなかつた。世間の口が動き出した。一人の友人は嘲弄的に、「誰だつて、テディーとして、その母親に爲すべき事が、まだある事は知つてると」云ふ。

此の口やか間敷い近所隣の連中が、テディーの母親に色々な事を云ふ。即ち母親を一人呼んで、密かに、お前さん、養育院等に居ないで、息子さんの家に歸り、女親らしくなさいよとけしかける。追々と母親の情に焚き付けて、遂には息子を悪ませる様に仕向けたものである。唆かされた母親は、自分を養育院に置いて歸らせないのは、全くテディーの仕事だなどと考へる様になつた。もう程よい頃と、ある日曜日、テディーが救世軍の集會に行つた留守を見掛けて、皆は母親にうんと酒を飲ませ、折角息子が骨を折つて、やつと手に入れ、誇りとして居た大事の家を、隅々まで叩き壊させ、尙ほ寄つて集つてそれを手傳つたのである。是がテディーに孝行を教へる爲なのだから驚く。

此の打撃は、到底テディーの得堪ゆる所でなかつた。彼は壊された家を出た。心は既に暴れて、落膽に陥つてゐる。遂に墮落してしまつたのである。

幸ひ天使中校の深切で、再び悔改の座に引き返されて、基督に歸ることが出来た。そして此の粗野な強い押入強盜然たる男が、子供の如く泣いて祈つたのである。今一つ此の墮落の爲めに大切な事が起つた。それは、彼が居酒屋で泥酔してゐると、一人の救世軍の女兵士が入つて来て、亭主に、此の男に酒を遣つては可けませんと命じてゐた。テデューは此の女に心打たれて、之を慕ふた。従来も妻を興へられん事を祈つてゐたが、今家が打壊されたので尙更に、それを恢復するには、是非妻が必要だと感じた。で、自ら此度こそ、眞に回心の出来た事を信するやいなや、女兵士に結婚を申込んだのである。

テデューは前にも云ふた様に、誰にでも愛される性質であるから、此の女も、彼が泥酔してゐる時でさへ、好ましい男だと思つてゐたので、今改めて心中の苦悶と望みを打開けられて、遂に彼を愛するに至つた。女の愛に助けられ、商賣も追々繁昌し、今では、小兒も一人生れて、喜びが顔に溢れ、ロンドンの金持街を古衣を買つて歩く人々の中では最上等の人間となつた。その幸福な家庭、裕かな家計は、近隣の手本である。

某日、テデューは中校を訪ねて、小隊の資金の中に五圓を寄附した。中校は要らないと云ふけれども諾かない。

「瓦斯代にお困りだつて云ふが、本當ですかい。一體瓦斯代が幾何で、それで幾何ありますか。

「お前さんの呉れた五圓を合せて私の手にあるのが十圓、書出は二十五圓ですの。」

「では、十五圓不足ですナ、何時が期限です?。」

「明朝ですの。」

翌朝八時に、テデューは十五圓持つて来た。

驚くべき人格の革新である。之を新生と稱ふも何の誇大の言であらうか。

外見上の失敗

二九四

是は珍らしい戀物語である。一體戀と云へば、流行の小説家は大抵中流以上の人の事を書くに定つてゐるが、今貧民間の結婚問題に就て聞くのも興味ある事である。加之、流石の宗教も、此の人間には匙を投げたが、而も惡その大奮闘に敗北しなかつた實例を示すもので仲々面白い。

此の書を記述する爲めに材料を蒐集めてゐた當時、時折は貧民窟を脱れ出して、上等町の方に歸つて息を繼ぎ、友人達に、貧民窟で發見した事を話すと、誰れも彼も例の現代式の物憂い調子で、「然し、再生した人達は、永久もそれで續くだらうか。一時の感情で變つたので、其効果はほんの束の間ではなからうか。」と疑うのであつた。

夫の「拳闘家」や、「常習犯人」や「動物以下」の如き話に對して、こんな冷い批評を聞かされて、私が如何なる感じを懷いたかは、これらの話を理解をもつて讀み、話の中の人々の中に、お天どう様の下に住む、此の世の一般の貧しい人達のものよりは、

更に深い性情の潜んで居ることを知る讀者には、よく分ることであらうと思ふ。それから私が今述べようとする話、それは態々「外見上の失敗」といふ見出しをつけ、故意に此の卷末に掲げることにしたのだが、私はこの話を聞いてから、回心の事實に對して冷評を加へる如き遊惰者は、默殺するに如かずと思ふ様になつたのである。彼等はゼームス教授著「宗教的經驗の諸相」の如き書物を解する程の素養もなく、幽遠なる靈的改革も、深刻なる情緒をも曾て經驗した事の無い謂はゞ皮相の人達なのだ。此の種の冷評家に對しては、七度を七十倍せよとの寛大の心を持つより外は無。例令、回心して、醜穢から純潔に、罪から徳に、我愆から無愆に、殘酷から慈愛に、地獄から天國に移つた人が、皆悉く、元の生涯に後戻りしたにしても、回心は依然として宗教最上の力であり、また榮光である。如何に短かくとも回心してゐる間は、喪はれたる者が救はれ、地獄にはご無沙汰で、天國に喜びがあるのだ。其時日が如何に少なくとも、其日に犯さるゝ筈の罪が、永遠に犯されないで過ぎるのである。其時期が短くあれ長くあれ、此等回心したる人々は、宗教上の經驗の凡ゆる歴史を宗教の

二九五

反對者に示し、彼等の信じようとしないうるものを実行によつて證明して居る。即ち最も賤劣悪徳の人間でも猶、貴い思想を持ち、純潔無私の生活を爲し得べきことを實證したのである。如斯は又、夫の「遺傳」と「境遇」の力にあまりに重きをおいて、悲觀説を立つる如き者を、反駁するに足るのである。

更に大切な一事がある。それは一度、否半分でも回心した者は、一生涯、回心の状態にあつた當時の清い思出、即ち地獄がどこかへ行つてしまひ、天國が己が身に近くあつた事を忘れない。思ふに其人は以後決して全然の悪人には爲らないであらう。たとひ中途半端にしる回心してからは、靈的命數と云ふものを少し餘計に考へてゐるに相違ない。私が集めた種々の事柄を綜合して考へて見れば、半分でも回心して、その後、外見上失敗した人は、例令墮落はしても、吾々一般のものと較べて見て、そんなに異りない。罪人でないとい惚れてゐる吾々の多くの者も、實は臆しながら罪を犯し、他面ぐすくと罪に對して反抗を試み、其癡始終、人の不死の靈魂に關して、詩人や預言者の言つたやうな、豪い事も出来るものだと信じて居るのである。

我は崇高なる闘ひの戰場なり。

わが衷に高き人、低き人、入り亂る。

我口洩るゝ惡しき言の葉も、

聽ては善きに變るなり、

沙漠の沙の草地に變ること。

私の言ふ處の墮落したる回心者は、永久までも奮闘者として立つて居る。よし宗教は棄てゝも、下劣な性情と闘ふ事を止めない。彼等の蹉跌は罪には相違ないが、之れを冷笑すべきではない。むしろ七度を七十倍するまでも赦してやらなければならぬ。讀者の中には、回心の永續を疑ひ、偽基督教の空言に惑はされて、此宗教に實際見る、貴重な奇蹟に對して反感を抱き、人類は、何等の宗教殊に感情的宗教は無くとも、立派に存在し得ると信じてゐる人もあらう。けれども其人々に格別注意して貰ひ度いことは、此の書中の話は、皆事實談であつて、ロンドン貧民生活の實際を代表するものだからいふことである。又最も獸的で、落魄して、汚れてゐる人間にも、宗教上の満足を得度

いこの熱望があり、これが無ければ彼等の生涯は極めて情けないものとなり、結局社会の敵となるのだといふ事を考へて貰ひ度い。彼等の回心を歓迎することは、彼等を助け、人類を助ける所以である。例令回心後再び元の墮落生涯に陥つても、彼等を赦して、再び起てよと勵ますのは、基督に似たる心のなす業である。彼等に對して肩を竦め、その改善の効果を否むことは、基督教の教主が人類に對して宣言したところの、主要なる天啓を否定するものである。私が此の書物に記した話の主人公達は、多くは數年間回心の状態を保持した者で、決して後戻りする様な事は無からうと信するが、萬一彼等が皆蹉跌く事があつたとしても、私は極力、その一時的の救も尙、宗教の真理を證明するに足るものであり、社会改善には宗教が最高の威力である事を主張するものである。

然し茲に一つ失敗談がある。外見上兎に角失敗と見えるものである。而しこれ迄の、失敗と云ふ問題の起らなかつた物語よりも、此話の方が却つて、回心の事實と價値とを疑ふ讀者を論伏るであらう。又此の話によつて、救世軍と云ふ特殊の宗教團體

に對する同情が一層深まり、其の方法を知らずして酷評する人が、之を敬ひ尊むに至るであらう。

此の書物の中で我々の瞥見した如く、此のロンドンの一郭に大變化を來たさしめた天使中校は、ロンドンを去つてある大工業市に赴任した。そこにはロンドンと同じく、酒は其の威力を逞しうして、貧民窟に、狹斜の巷に、凡ゆる汚穢を生んでゐた。新しく彼女の受持つ事になつた小隊は、多くの點に於て、尊敬すべき成功ある支部としての特性を備へてゐた。夕べの集會は大抵一杯で、集る聴衆は、裕福な幸運の人々であつた。ロンドンの集會で見るやうな、後の方の椅子に一ぱいになつてゐる、頭は亂らで、顔は酒で赤い賤奴は、見度くても居なかつた。そこで彼女は此の市には無頼の徒が居ないのかしらと、半ば怪しみ、半ば物足りなく思ひ始めた。熱心な宗教家は慙うしたものである。

然し、訊いて見ると、仲々澤山の救出さなければならぬ賤奴が有る様子で、多くの暗黒なる貧民窟があり、特に或極惡の町では、誰れも宗教の名を口に言ひ出すさへな

しかねる程の有様で、犯罪があくまで繁盛してゐる事を知つたのである。二三日後、中校は其邊を訪ねて、早速戦闘の計畫を立てた。

注意して視てゐる中に、此の町に一人の男がゐて、其勢力が凡ての人々を壓してゐる事を知つた。其の男は犯罪者では無い。又全くの悪漢と云ふでもない。而し彼の人格の中に一種の魔力があり、或力ある特質があつて、それが他人を惹き付け、彼をして威望家たらしめてゐた。未だ歳も若く、元氣は溢れてゐる。彼に抗して闘ふとする者は無い。只彼の悪習は酒であつた。

彼は既婚者で、合宿所に母親と同居し、其處で、暴漢共を支配し、腕力を用ひて、秩序を保つてゐた。酔つてゐても正氣の時でも、必ず合宿所相當の禮儀を守つて、皆の心を收攬してゐた。母親は息子に満足をしてゐて、只、今少し有用な働きをして儲け、居酒屋で酒ばかり呑んでる事だけは止めて欲しいと思つてゐたが、其他は結構な息子であつた。

中校は思つた。此の男を捕へて救世軍に入れたならば、多くの人々が彼に従つて這入つて來るに相違ない、と。其處で一生懸命、此の男の同情を得ようと努めることにした。

或日、件の男が町を通つてゐると、優しい小柄の女士官が、制帽を被つて、途の真中に彼を待受けてゐるのに氣付いて、驚きの眼を見張つて立止まつた。

ロンドンには更なり、英國の大都市に於ては、その極悪非道の巷に救世軍の男女士官の姿を見ない事は滅多に無い。彼等は望無き男や、棄てられた女の眞只中に入込んでゐて、それで何の害も侮辱も加へられない。ロンドンの一部の中に記した泥醉漢は、此の天使中校に向つて、「君の様な連中は侮れねいや、己等の様な者の世話をする君等は侮れねいや」と云つたのである。

然るに何如なる故か、茲に述べる悪人町は、救世軍人の訪問を受けた事が曾て無かつたのである。それで今一人の救世軍女士官が、界限で恐れられて居る威望家に面と向つて、微笑を洩してゐたのだから、人々は誰れもかも申し合せたやうに、往來に飛び出し、或ひは居酒屋の門口に出で、或ひは合宿所の戸口に立つて、一齊に彼女に目

を注いだ。

威望家自身も呆氣に取られて、無言のまゝ、中校の言葉に耳を傾けたのである。中校の戦略は恂うであつた。彼女は静かに、泥酔漢や無頼漢を濟度する爲めに一大集會を開かうと考へてゐるが、何分此の町には始めて、よく實狀を知つてゐる人達は、必ず大反對が起る、或は暴動が始まるかも知れないから、お止しなさいと忠告してくれる旨を話し、更に「貴下の勢力の大きいことを伺つて居ますが、何卒御保護を仰ぐことが出来ませうか。實は心配なのですから」と述べた。

男はやつと中校の語る意味を解し、内心大いに己惚の心を煽られた。

「何卒集會に出席して、無法な亂暴を働くやうな者があつたなら、貴下の勢力で制止して下さいな。心配してゐるんですから、是非助けて被下い。願ひ致します。」と中校は追驅けて言ひ足した。

婦人の愛らしい顔と疑はざる願とは、それに優しい聲も手傳つて、此の危険人物の心を直ぐに動かした。その心には、義侠的な、善良な、武士の魂が湧いて來た。彼は

その町の真中で、始めて己が良心に訴へられて、是迄と變つた人間にされたのだ。中校は、彼の幽玄神秘なる意識の原野に觸れて、その魂を捉へたのである。

ゼームス教授は次の如く言ふて居る。「強い感激によつて起る貴重なるものは勇氣であつて、此の性情を多少加減する事に依つて、人も變りその生活も變るものである。種々な感激によつて勇氣が生ずるといふのは、例へば疑ふべからざる希望の生じた場合、靈感を與ふるが如き龜鑑に出逢つた時、又は愛や憤怒の心の生じた時等がそれである。多くの人は、危険だと見ればすぐ躊躇してしまふが、或人々は、生來勇氣に満ちて、一寸した危険に會つても直に勇氣百倍するのである。斯かる人にあつては、『冒險好き』といふことがその感情の一切であるかの如く見える。教授は又スコブレフ將軍の言を引いて居る。それは『余の勇敢なるは、一に危険に對する感情であつて、また危険を嘲る心に外ならない。危機に起つと、馬鹿に愉快を覺ゆるのが余の平常である。それも少數の人だけで危険を冒す様な時は、尙更愉快なのである。或事件に參與るに就いては、相當の感激を受ける者でなくては承知が出来ない。凡て智的な事は、餘に取つ

ては甚だ拙い。が、一騎打の決闘の如き、自分が専心之に没頭し得る事ならば、非常に面白く、愉快で、全く酔はされて仕舞ふ。余は狂するが如く之を好み、愛し、崇拜する。他人が女の後を追つ驅ける如に、危険な事を追ひ求め、それが小止みも無く起れば可いがさへ思ふのである。常に危険があつたら、毎日面白い事であらう。危い事の有り相な冒険を始めると、不安なのが既に面白くつて動悸が昂まる。出来れば今かくと云う焦燥の氣持が其儘長引けばよいが願ふ。痛い様な快い感で身が震ふ。至心強大な勢運を喰つて、危機の方へ飛び出して、いくら制しようたつて制しきれない。』

そこで吾中校が、今助けを求めた此町の強の者は、其國民性や、教育、境遇の異なる丈に變つてはゐるが、恰も、右の將軍のやうな男であつた。そこで彼はその勇敢な冒險の性質から、喜んで中校の訴を聞き、敢て彼女の保護に任じ、集會を無事終始せしめる事を堅く約束したのであつた。

大きな會場で開かれた集會は、其町内の極悪人共で満たされた。有名な悪人で悔改た者共が、回心の證をするとの廣告で、人が多く集まつた。加ふるに、彼等の畏敬せるジャックが、同じく集會に出席すると云ふので、一層皆の好奇心を唆られたのである。

かくして新會場は、恐らくそれが建てられてから初めて、他の宗教團體からは殆んど全く顧みられないで、救世軍のみ最も熱心にその傳道に傾注してゐる汚劣、醜穢無頼、無所屬なる國家の廢物を以て、文字通り立錐の餘地が無いまでに満された。そこでジャックは、嘲笑する者や泥酔漢を嚇しつけ、若し此の小柄の婦人の爲る事に、妨害を加へる者があるならば、其處から掴み出して憂目を見せてやると宣言し、集會が始まるまで彼の威望をもつて秩序を維持して居たのである。

先づ軍歌を唱つて、次に中校が、自分の好む「放蕩息子の比喻」の處を朗讀した。此處迄は何の事も無く、ジャックが時々しかづめらしい顔を差し向けて、靜かにしなければ懲してやるぞと脅す丈で充分であつた。八ヶ間敷事を起し度い連中も、それで不承々々乍ら靜かにかしこまつて居た。

遂に證言となつた。

處がジャックは、忽ち狼藉を喰止める役を忘れて仕舞ひ、後方で立ち乍ら聽いてゐる一群の人々の前に立つてゐた。講壇の上には、以前、拳闘士、常習犯人、浮浪人、又は小盗人であつた者共が、深い幸福な様子で立ち列んで、回心によつて來つた喜びを述べて居る。彼等は回心とは、神に背叛た意志を改めて、人々の爲めに心を痛めて居て下さる神様に全く従うことだと説明し、幾度も幾度も證言して云つた。「茲に如何程悪いと思ふ人でも、又如何許り望みなく、耻かしく、棄てられたと思ふ者でも、たゞ公然此悔改の座に進み出て、跪いて神に愛憐を請ひ、心の重荷を取り去つて下さい、凡ての誘惑に打ち勝つ力を與へて下さいと、心をこめて祈れば可いのである」と。終りに例の如く悔改の座に人々を招くと、多くの墮落した賤奴共が前に出た。其中に、かの人々を取鎮めんが爲めに來てゐた當のジャックも居たのである。彼をして此集會に來らしめた精神が、今また彼を驅つて悔改の座に導いたのであつた。彼は強い勇氣ある男ではあつたが、酒は彼の主となり、彼は其奴隷である事を

今始めて知つたのである。このまゝでは彼の名譽心が承知しない。此の様な暴君に反抗して闘ふのは、丁度ユーゴーの所謂「莊嚴なる闘」の一つでもあるやうな立派な戦闘であると思ふた。彼は起上つて悔改の座に出た。それは六ヶ敷い事、勇氣を要する事であつたからである。決して「悲哀の人」なるキリストを熱愛し、神の愛によつて無上の善びを感じたからではない。また何も懺悔を爲やうとの心でも無かつた。只突如彼の頭が動揺して、元氣が一點に集中したのである。「何恐れるものか、必ず酒を制してやらう、勝つてやらう」と云ふのであつた。

中校は此時の話をして、「ジャックは單に酒から回心したので、尙本當のものではありませんでした。」と云つてゐる。

然し兎も角、それは一大事件であつた。彼が再び起ち上つた時には、全く別人の如く革まつた人であつた。自分の靈性に一大變化の來つた事を感じて、己は救はれたと云ひ、集會には必ず來る、友も誘つて來ようと言つた。かくして彼は、心樂しく自信を懷いて出て行つた。

すると茲に一悲劇が起つた。それは彼が若い時に迎へた妻は、彼を善人たらしむる力もなく、そうかといつて彼の悪い感化を受けても之を拒むことも出来ない女であつたが、追々と彼女は道徳的に萎縮して仕舞つて、ジャックですら嫌悪を覚えて居たのである。幾度怒つて殴り付けても一向利目は無かつた。で今となつては、彼の體面上からも少し行を慎むやうにたしなめたが、矢張無効で、いよ／＼益墮落して行くのであつた。

酒慾と闘ひ初めた男に取つて、此の哀れな動物を同伴者としてゐるのは甚だ厭はしく、心狂ふ許り厄介である。

此の様子を視て取つた中校は、一方女を救はうと努め、他方では、男を慰めて此氣障りな状態をも忍耐するやうに奨めながら、事の成行きを注意してゐた。しかるに不幸、或日男が遂に元の泥酔に逆戻りしたとの報知に接した。

彼女は直ぐに、自轉車に乗つて悪人町に馳せ向つた。半分位も来た處で、澤山の人集りがして居るので、何かと思ふと、たづぬるジャックが、其の弟と血みごろになつ

て大喧嘩の最中だ。全で狂人のやうである。兩人共顔は切傷だらけで血にまみれ、殺さずば止まじと云ふ勢で、其の掴み合の物凄有様は、狂人でよもなければ其の仲に入る者は無い位。然し大膽にも中校は、自轉車を側の人に預けたまゝ、早速喧嘩の中に割り込んで、ジャックの腕をしかと捕へ、お罷めなさいと説きなだめた。ところがジャックは、恐ろしい呪詛の言葉を中校に浴せかけて彼女を振り離し、二度と邪魔を入れたら殺すぞと嚇しながら、再び弟に飛びかゝつた勢は、前よりも更に憎悪をもやし、憤怒を心頭に發して居た。丁度其近所に一つの馬小屋があつて、戸が開いてゐた。中校は、側で群衆が見物してゐる爲めに、却て兩人を興奮させてゐるのだと氣が付いたから、兩人が互に抱き合つて、よろ／＼小屋の戸に近いたのを見澄すや、自分でも如何して出来たのか解らないが、矢庭に飛びかゝつて兄弟を、そのまゝ馬小屋の中に押し込めて、外から戸を閉ざして錠を掛けてしまつた。

蹉跌いた回心者ジャックは、それでも次の集會には、傷痕鮮かな顔を其まゝやつて来て、再び悔改の座に進み出で、もう復とは酒を飲まないと誓つたのである。

中校は之を見て、耻かしい中に、よくも公然とやつて来て、近所隣りの悪い眼をも憚らず、再び神の赦しと助けを請ふ其美はしい勇氣を喜んだ。が思へば夫の悪い細君が附てゐる。果して此度の回心が完うせられるだらうか、復々蹉跌く事は無からうかと内々尠なからず心配であつた。はたせるかな間もなく、ジャックが妻を家から叩き出したと云ふ報知がやつて来た。中校は直ぐにジャックの處に訪ねて行つた。其時彼は、あの女と一所にゐては善い生涯は送れない。既う追ひ出して自由になつたから、此上は決して墮落はしまい。酒も葺も飲みませぬ。賭事も争闘も致しませぬ。いつも清い、強い精神を持つてゐませうと云ふのであつた。

然し、茲に一つの問題がある。一體此の男の妻に對する責任は如何するのだ。妻を追ひ出して果して悪くないのか。多くの人は、そんな事は問ふまでも無いではないかと憤つて、勿論宜しいと云うかも知れない。成程女は悪いだらう。その感化によつて男が善くなれない。彼女は神様と夫の間に立ち塞がつてゐる。然しながら、一つの絶對なる主の命に、只これ従ふ宗教信徒には、さう容易に是認が出来るものではない。

夫は嘗て妻を保護すべく誓つたではないか。而して今街衢に投げ出したのである。嘗ては神に祈つて、彼女を愛する事を約束した。而して今之を世の中に放逐したのである。彼の救は利己的の救だ。彼女をも救はなければ、基督の救に與つた事にはならぬ。さうかと言つて、妻を引返したら、恐らく一緒に奈落の底に陥る許りだ。誰れがこんな事をするやうに忠告する者があらうぞ。

中校は煩悶せる人を、母の愛を以て慰めながらも、此の問題には眞に惱まされた。かくして問題の紛紜はまたく込入つて来たのである。

ジャックは、妻に多少の手當を送る事になつて、一緒に居る事だけは免れ、新しい生涯を始めた。

彼の變化は眞に目覺しいものであつた。見た處氣さくで、行ひは清く、可成の生活をなし、集會にも几帳面に出た。尤も決して熱誠な信心家と云ふ程ではなく、その理想も地上の事を離れては居なかつた。彼の心を支配せる力は、必ずしも天上界のものではなく、明かに人間界のものであつた。只初めに彼に義侠心を起さしめ、その後幾度

墮落するも、猶信じて呉れた純潔な婦人を悦ばせ度いの一念に驅られてゐた。彼はかうした人情から、出来る丈け宗教の圏内に入つたのである。

此の程度のことでは未だ足りないけれど、彼の及ぶ限り進歩したのだからと思つて、中校は満足せなければならなかつた。何といつても中校は女である。彼にかくまで敬愛せられては、悦ぶ心が先き立つた。又彼女が一個の傳道者として、彼の性格に起つた大變化を見て喜ぶのに無理はない。しかし今、救世軍人としての使命を思ふ時、彼が未だ眞の靈的生命を去ることの遠きを氣遣ひ、其の將來に就いて心痛せざるを得なかつた。それでも暫くは無事に過た。嘗ては悪事と云つたら必ず頭梁株であつたのだが、眞面目な秩序ある事さへあれば、勢力家となり、敬まうべき模範として立てられるといふ状態を續けて居たが、惜むべし、遂に三度悪魔の虜となつてしまつた。

しかしながら宗教が、悪人なるジャックを變て、正直な眞面目な自尊心ある市民とした事を記憶しなければならぬ。また妻が家を出て後は、近隣から執念深くやつて来る誘惑に反抗して、非常に困難な戦をよくも戦つたことを、視てやらなければな

らぬ。それから話が次の幕に移る前に、特に此事を覚えて頂き度い。此の男は回心いや半回心、否或は實際回心を爲なかつたにも不拘、宗教の感化を受けて、嘗ては悪人であつた者が、善人になり、彼の住んでゐた處では、聖徒と云つてもよい程の人間に變つたのである。

扱て話とは次の如くである。

或日ジャックは、母親の處で朝早く起き、顔を洗ひ衣物を着更へて、未だ皆が寢て居る中に、其日の仕事に出掛けようとして、戸を開けて見ると、入口の石段の處に、一人の女が二重になつて蹲つてゐる。何處かの哀れな宿無し婆々が、此の玄關口に忍び込んで、一夜の宿を盗んだのであらう。そう思つてジャックは疾口に而し、優しい聲で呼び掛けた。

「オイ何してるんだ。

女は膝から顔を擡げて、頭を廻らし、物倦い睡むさうな眼で彼を見上げた。それはどうして若い、美しい女で、悲しげな顔は、露に濡れた秋海棠のやう。

衣装も相當である。注意して見れば、一方の眼の下が紫色になつてゐる。

「昨夜妻はさんざ打たれたのです。それで別れて来て仕舞つたんです。もういやです。どうしたつて歸りませんわ。」

「それはお前の良人のことか？」

「否良人ではないんですの。」

「ではこれからどうしようつてんだ？」

「私には解らないわ、しかし兎に角あすこにはもう歸りません。」

「さうか、そりや氣の毒だナ。」

「いえ、構ひませんわ。」

ジャックは衣囊を手探つて、少しの金を取出した。

「是は少しだがネ、珈琲の一杯も飲みなさいよ。出来りやもつと上げ度いんだがネ。何しろ氣の毒なこつた。お前さん若いから街をぶらついてゐてはいけないよ。」

そう言ひ残し、一寸會釋して其の儘出て行つた。

此の時のことを中校は、普通ならば憎らしさうに云ふ處を、同情をもつて慰めてやつたといふのも、悪魔が娘の心に魅つたのですよと云つてゐる。が私は思ふに、男の深切な言葉や、人を惹付ける眼から溢れてゐた男らしい同情に接して、棄てられた哀れむべき女の心に、あるものが溶け込んで、新しい希望が發つたのであらう。或はジャックの言葉は彼女の未だ聞いた事の無い程、深切なものであつたかも知れない。そしてジャックは、彼女の見た人の中で最も善い人であつたかも知れない。寒いく冬朝、冷い同情の無い世の中に只一人、合宿所の戸口に立つてゐる女の様を思ひ、男の深切な言葉と、同情に溢るゝ眼との、女の心に起した感激を思ひ合せれば、さう悪魔の働だ等と考へなくとも、將來起つて来る事は大抵解る。況して女は未だ少女と云つても可い位の年輩である。

ジャックが仕事から歸つて見ると、娘は矢張街に待つてゐた。實は男も一日女の事を考へてゐたので、待たれてゐたのはまんざら嫌では無かつた。その可愛らしい顔と、訴へる様な眼が、男の心に觸れたのである。

娘は、ジャックを引止めて、ものゝ四五分も小聲で話して居た。ジャックは女の云ふ事を聴いて思案してゐたが、遂に一緒に連立つて何處へか行つてしまつた。それから一日二日して、回心したジャックが、秘かに情婦を圍つてゐるといふ事が、中校の耳に入つたのである。

さて茲に一つの問題が起つた。と云ふのは、ジャックは平常の通り會館の集會に出席し、信者としての責任も果して居たのである。そうした彼を偽善者と言ふべきだらうか。こんな淺薄な疑問を起すと怒る人もあるかも知れないが、然し實際目前に、罪を犯してゐる人を幫助すると云ふことは、救世軍として出来る事であらうか。救世軍の貧民に對する働きの一大方面は、家庭の純潔でふ問題である。此の面倒な結婚問題が、貧民窟に於ける社會改良家に取つて、如何許りの大問題であるかは一般には知られてゐない。救世軍は結婚の神聖の爲に、偉きな働きの昔も今も行つてゐる。氣も沮喪する許りの困難の中に、此の大事業を進めてゐる。夫と妻とが別居する事を許し乍ら、離婚する事を許さないで、彼等の再婚を不可能ならしめる英國の法律は、多く

の害毒を此の社會に流してゐる。毎年幾千人にも登る相別れた男女が、殆んど例外なしに新しい伴侶を見出し、國法の認可も、宗教上の許しも受けないまゝで同棲して居る。年々幾千幾萬の青年男女が、結婚しては貧と酒と殘忍との爲めに別れてしまつて、社會に大なる害悪を流布し、結婚に關する宗教上の宣誓を無視にする傾向を生じてゐる。貧民窟に於ける野合の數は夥だしいもので、結婚の結末は、年々歳々弛み行く一方だ。救世軍は如斯く現在國家にとつては危険であり、將來子孫の不幸の基たるべき嫌忌しい状態に對抗して、嚴格に純潔の觀念を鼓吹してゐる。男女の愛が信仰によつて神聖化せられ、美はしい家庭を作つてゐる輝かしい實例を最上の武器として、悲惨、落魄と戰ふてゐる。救世軍はロンドンの最惡の巷にあつて、結婚の純潔を主張して止まない。結婚の神聖の爲に働いてゐるものゝ中で、英國の最下等の町に於て、昔ながらの回心の蘆笛を吹き立てながら、救靈に熱中せる救世軍傳道者の一團程の働をしてゐるものは、他にはまづ無いと私は確信する。

閑話休題、中校は、此の事件を奈何裁いたものであらうか。教會ならば、ジャックを聖

餐式に列せしめないに定つてゐるが、彼女もそれに準つて、彼が救世軍の集會に来る事を禁じて、舊の放逸の生涯に投げ返し、罪と墮落の淵に沈めたものであらうか。困つた事件である。彼女には只一方の活路しかない。覺醒したジャツクの良心に遡ふるの外は無い。

天使中校は、ジャツクが唯一人居る處で懇談を試みた。始め彼は、中校の思はくを氣遣つて、嫌疑を否定してゐたが、中校が叱責しながらも微笑を洩し、偽言を悲しむの意を現はして、既う皆知れてゐる事を告げると、此度は大いに辯解に努めて、いや實は哀れな棄てられた娘を保護して、世間の陷窠にかからないやうしてゐるのだと云ふ。然し何處までも深切に優しく問ひ詰められ、遂にはジャツクも、包み切れず、彼女の眼を見つめながら「もう偽りは申しません。實はお察の通り、愛してゐます」と告白した。

そこで中校は、彼の良心に訴へて諄々と説いた。「その女を思ひ切らないか。彼は女と同棲して罪を犯してゐる。それは自分諸共女の魂をも亡ぼすものである。彼を是迄

に救つて下さつた基督に従つてゐるとは云へないではないか。否全く、深い教主に己が背を向けてゐる。女を思ひ切らないか。女を助けて善良し、自分の魂を助けて、潔白無垢にする氣は無いのか」と。

しかしながら、彼は女を思ひ切らうとはどうしても考へない。

ジャツクにはそれ相當の理屈もある。彼の立場から見れば、問題は確かに理に適つてゐる。女は深く自分を愛し、善い生涯を送るやうに、助けようとしてゐる。自分分は始めて幸福な家庭を持つ事が出来たのだ。此の女の愛無しに、世の中を行く事が出来ようか。若し彼女がこの己れを引き墮して、宗教に冷淡ならしめる様な事でもあれば、其時こそ女を逐ひ出しても遅くはない。然し今彼女の感化によつて、善良になり、深切になり、禮儀を覚え、人品が向上し、加へて幸福なのである。彼女は自分を助けてゐる。同居したからとて別に罪だとは思はない。自分が罪の淵に在つた時なればこそ、自分の魂を地獄に迄引墮すやうな女と結婚したのだが、回心した今日、始めて善い女を發見して一緒に、善事を爲す元氣を附けられてゐる。若し法律で、妻

と離婚が出来たならば、此の娘と結婚が能る。しかしそれが許されないとすれば、あく迄女の味方になつて、之れを保護し慈しみ、死に到る迄も愛する。誰れも自分と、自分を幸福ならしめる此の善い婦人との間に、立入る事を許さないと云ひ張つた。彼の立場にも理論は立つ。が悲しい哉、それは宗教の教ふる處と明かに衝突してゐる。現代人の見方から云へば、ジャツクの論理は立派に通る。然し宗教は二つの世界を觀てゐる。基督教に於て非理の如く見ゆるものは、却て世間に受け入れられる理論である。基督教は道徳律ではない。それは宗教である。而もそれは地に足を置いてゐるものではない。宇宙全般に亘る宗教である。如何に六ヶ敷又不合理に見ゆるとも、之を信じ、その訓誡を遵守する者は、心安い義い生涯を送ることが出来る。それは時と場所との支配を受けず、永遠の生命に入るべき、精神の向上發展を以て目的としてゐるからである。

此の大難問に出會して困りながらも、優しい中校は、只一生懸命福音を説いて、其主張を固守した。福音の主張は、甚だ強いもので「汝、神と財とに兼事ふる事能はず」

と云ふのである。ゼームス教授は「分割されたる自我」に就いて論じてゐるが、宗教は此の自我の分割を癒し、その結合を完成するものである。此の點に關連して、澤山の句が心に浮んで来る。「神よ汝は汝の爲に我等を狂はしむ、されば汝の懷に慰ふまでは我等の心安からじ。」昔の神秘家は教へて曰ふ。「汝の胸を打ち開き、神の前に最も大切な事、即ち神との直接の交通を妨ぐる凡ての思を去れよ。」人の魂完くして、神と一つなるを得べし。「神によりて僅かに支へられしといふのみにて、未だ會つて神と深く交はりしことなき悲惨なる人々の状態や果して如何。其の暗黒、貧窮、不毛、冷酷、乾燥、死滅、空虚、荒涼、孤獨の状を見よ。あゝ呪はれたる者よ、我身より離れ去れ。我れはもはや、消えざる地獄の火に行くを要せず。此の世は既に苦しき地獄なればなり。」

人間の二重性を調和せしめ、彼の目的と愛情とを只一つのもの、即ち創物主たる神に繋ぐものは宗教である。かくして我等は始めて、内的二重性より來る争闘から免るゝことを得るのである。是は夫の神秘家が稱んで「宗教の結合法」と名くるものである。

そこで何よりも先づ此の立場を了解して置かないと、雄々しく基督に従ふは、文明の暗黒界に入り込み、深い同情を傾けて、悲しみ惱みの中にある人々に、純福音を宣傳する人々の立派な深切な精神を認める事は出来ぬ。又此の種の人達は、何人と雖も、神の意志に全く従はない者は、到底幸福に生き、平安の心を持ち、進化の道程を無事に辿ることは出来ない。確實に信じてゐる。此の確信あるが故に、彼等は何處までも、全き聖潔の事を説いて止まない。

さて暫く、次の二つの興味ある證言に聞き度いのである。

その一つはアドルフ・モナドの言である。曰く、「自分の狂氣は制限が無かつた。そのために全心を捕へられてしまひ、極めて無頓着な皮相の行をさせられるかと思ふと、忽ちにして最も高尚な思想が湧き起つたりして、自分の感情も判断も幸福も根元から腐つて行つた。茲に於て、自分の亂れたる理性や意志を以て、混亂せる精神状態を矯めやうとするのは、恰も盲目の人が、一方の眼の誤りを、同じく見えない他方の眼で正さうとする様なものである事に氣が付た。我れ以外の何者かの感化を仰がなけ

れば駄目である。其の時思ひ起したのは夫の聖靈の約束である。従來は如何にしても解らなかつた福音の宣言する所が解つた。遂に必要に迫られて、始めて、我が魂の要求に應ふべき約束、即ち我れに思想を與へ又之を取り去り得る、眞實にして上より來る超自然的作用が、神によつて我が衷に施されることを信ずることが出来る。そして自然界の主たるその神が、我が心の眞の主となり給ふ事を學び得たのである。そこで自分は己が持てる凡ての價值、能力を捨て、己に頼る心を擲ち、自分は悲惨な者たる以外の何者でもないことを認め、只神の慈悲のみを俟ち望んで家に歸り、跪いて、今迄會て無かつた程熱心に祈つた。その日から我中なる人は新しき生涯に入つた。我れ哀愁が霧消したのではないが、最早や我を痛ましむる力は無い。希望は我心に發し、一度新たなる旅程に上るや、我が全てを任せたる耶穌基督の神は、徐々に、凡ての事を爲し給ふたのである。」

次に擧げるものはマルチン・ルーテルの言である。即ち「神は、謙遜なる者、賤しき者、虐げらるる者、望み無き者、價值なき者の神である。盲人の眼を開き、哀傷る

者を慰め、罪人を義くし、失望し呪はれたる者を救ふは神の御意である。夫の人間は罪なく、汚れなく、賤しからず、呪はれず、却つて義くして、聖しとなす如き、愚かしくも嫌悪すべき思想は、神の力が、自由に働く事を妨たぐるものである。故に神は、其大槌（モーゼの律法）を取つて、之を打ち砕き、己惚の鼻を拉ぎ、その助け無く呪はれたるものたる事を思ひ知らさなければならぬ。然し此處に一つの困難がある。人間と云ふ者は一度戦慄し、地に投げ付けられると、再び起き上つて、「今やわれ傷き惱まざる、今こそ恩恵を仰ぐべきの時、基督に聞くべきの時なれ」と云ふ事が出来ないのである。人の愚さは際限の無いもので、斯くの如き目に會はされても矢張懲りないで、又々律法に來つて良心の満足を得やうとする。「よし將來、是非改めよう。あれも爲よう、これも爲よう」等と云つてゐる。然し人々よ、汝はその反對に、モーゼと其律法を放擲し、恐怖と苦惱の中に、汝の罪の爲めに死に給へる基督を捉へずば、汝に救の來らざるを知れ。汝の僧帽、圓頂、獨身の誓、服従の誓言、無財、服役、功勞、夫等は果して何の用ぞ。モーゼの律法は何を爲し得るや。落魄し、呪はれたる罪人

が、若し自らの働と功德によつて神の子を愛し、之に來る事が出来るとするれば、彼が人間の爲めに、十字架上に斃るゝの要が何處にあつたか。落魄し、呪はれたる罪人ルーテルが、何か他の價を拂つて贖はれ得たならば、神の子の與へらるゝ必要が何處にあつたか。他に代るべきものは無い故に、羊も牛も金も銀も用ゐられず、神自ら、全然「我が爲めに、」然り全く此の下賤なる罪人ルーテルの爲に、十字架に付き給ふたのである。されば我は悦んで之に歸依するのである。此の歸依の心こそ、信仰の威力なのである。基督は義人を受け納るゝ爲めにあらで、歪める者を正して、之を神の子と爲さんが爲めに死に給ふたのである。」

如斯は實に救世軍の信仰であつて、天使中校がジャックに説いたのも此の福音に外ならなかつたのである。讀者は、救世軍人が喪はれたる者、零落者等に宜べ傳へる處の、不動不變なる福音に就いて充分に、正しい理解を持つてゐなければならぬ。ジャックは黙つて中校の説く處を聞いて居たが、別に辯駁しようともせず、そのまゝ出て行つてしまつた。彼は自分の信んずる處に従がつて、生きて行かうとしたので

ある。

中校は其の後度々彼に逢ひもし、彼に就て聞く事もあつたが、常に其の良心に訴ふる事を止めなかつた。然しジャックは漸々信仰から迂り落ち、人が悪くなり、遂には全く、善良ならんと努めることをも廢めてしまつた。

或日中校が其の家を訪ねると、折よく彼は一人でゐた。今こそと思つて、及ぶ限り深切に優しく、彼が神に事へて、他人をも善くしようと思つて、清い生涯を送つてゐた數ヶ月前と、今日との如何に變つて居るかを云ひ聞かせた。ジャックは稍感じたらしく、眞面目な様子が見えたのを幸、中校は、彼が罪の中に同棲してゐる女の魂の事を色々説いた。女は本當に善い女か、潔い女であるか。彼女は果して、神が女に要求め給ふ如く、他人の爲めに犠牲の日々を送つてゐるか。彼がこんな罪の毎日を送つて居ながら、それで神の前に嚴かに、女の意志を神の御意志に結び付け、彼女に最善の生涯を送らしめることを妨げては居ないと言ひ得るか。

ジャックは憐れにも心惱みながら、中校の穿つが如き言葉を傾聴した。一々尤もである。主無し犬の如く自分の處に來り、始めの頃は愛らしく、深切で温順に見えた娘も、今は悪い習慣を覚え、悪い婦人を友として、心を頑なにし、闇の中へと墮ち行くのであつた。恚して生活してゐるのは善く無いが、しかし自分は彼女を愛してゐる。

他に愛すべき女は無い。一體奈何したら可いのだらうか。
「女を思ひ切つて、救世軍の婦人ホームに入れたら如何ですか。遂には救はれて、他の落ぶれた不幸な人を救ひ出す者となる事もあるでせう。」中校は飽くまでジャックに説き奨めた。

「エ、お奨めは難有うござんす。それでは恚うしやしやう。俺にはあの女を追ひ出すこたあ出来ませんが、女の方で行くと云ふなら氣儘にさせやしやう。」

ジャックは頭を擡げて答へたが、實際是以上のことをするのは、彼にとつて忍びない事ではあつた。

回心した人間の言葉とは取れないであらうが、然しセント・アウガスチンの初期の祈禱も此の位のものであつた。兎に角、回心以前に比ぶれば、餘程變つた出方である。

やがて女が歸つて來たので、中校は種々と理由を話してきかせ、兎に角婦人ホームに入りませうと、決心させることに成功した。

そこで其の夜直ぐ、中校は彼女をロンドンに伴ふて、婦人ホームに連れて行き、一緒に翌日迄泊まつて居た。然るに朝になつて女の目が覺めた時、何といふ幻滅であつたらうか。女は自分で悔恨する事も無ければ、靈の事も考へてはゐない。清められた潔白な魂なんと云ふものにも用は無。自分の氣に適ふやうなものは一つも此のホームには無い。他の婦人達は、心碎かれて悔恨の中にあり、喜んで謙遜にし、沈黙を守り、隠忍の状態に甘んじて、悔改の行を爲してゐるのであるが、自分にはそんな事は一つも無い。自分を罪人だとは、てんで思つてゐない。奈何してこんな處に居られようか。

折角連れては來たものゝ、これではどうにも仕方が無い。中校は止むを得ず元の町に伴ひ歸つて、再びジャックの許に返したのである。

かくてジャックは、全く救世軍を離れてしまつた。救世軍流に云ふならば、所謂墮落

したのである。世間の人は彼を指して、見よ感情的回心の實例が、こゝに在ると悦ぶことであらう。中校からもジャックは全く失はれたる羊であると思はれた。

其の後何の音信も無い。彼は多忙な救靈的生涯をば續け得ないで、一見宗教の力の及ばない、哀れな郭の深みに沈んで行つたのである。

乍然、その後の成行きはかうである。

二人の同棲は案の通り面白く行かなかつた。二人は共に墮落に墮落して行き、互に忍び援け合う聖き愛心も失せてしまい、喧嘩と格闘の絶間が無く、結局別れ別れになつてしまつた。それ許りでなく、女はごこかの男と野合をし、男は別れて居た妻を呼び戻して復同棲して居た。

それから大分経つてから、中校は轉任の命を受けた。彼女の出發の夕、特別集會を催して、町のためにかくまで働き、貧民無頼の徒の友となつてくれた人の爲めに、送別會を催したのであつた。

處が驚くべし、其の集會にジャックが來てゐて、終りに悔改の座に進み出た。

元より彼が此處に現はるべき場合では無かつた。彼は悔改の座で、人々と共に跪いたけれども無益であつた。彼が来たのは全く自分の意志で、勇氣を振つて、出て来たに相違ないが、それは只自分の一個の考へに止つて、上よりの導きに従つたものではなかつた。けれども思ふに、ジャックが高尙なる生活には入る事の出来無かつたのは、失敗と云へば失敗だが、それも相對的のことである。中校が彼を救ひ出し得なかつたのは遺憾であるが、然しそれは外見上の事で、實質に於ては、あながち無駄骨折では無かつた。何故ならば、ジャックは中校に、男らしい告別の手紙を送つて、自らの弱い事を告白し、彼女の寛恕を請ひ、彼女の深切に對して満腔の感謝を捧げたのである。それは逆戻り爲ながらも、全然以前の墮落迄は、戻らなかつた人の手紙であつた。夫の陳腐なる「一度愛を懷いて再び之を失ふとも、一度も愛せざりしに優る」この格言は、斯かる場合にこそ、新らしい意義を生ずるものでは無からうか。

救世軍の失敗！然り一々枚擧すれば、大部の書物が出来る事であらう。けれども如何に墮ちて行つても、一度悔悛の状態に在つた時、天の幻を見た時、純潔と恩恵

とを慕ふた時の心を忘るゝ事は無いであらう。開拓せられざる意識の野、即ち大我の中に、此れ等の記憶が働いて、至善至純な某處に導いて行くのである。深遠なる思念が、一度深く植ゑ付けられた以上、それが人の心から根こぎにされるものではない。一度最高なものを眺め、之を認め、之を欲した魂は、其の後永遠に、最も下等なるものを以て満足する事は出来ぬ。人からは失敗者と言はれても、彼らの或る者は、秘かに祈つてゐるかも知れない。而して、殆んど凡てが、若し回心しなかつたならば陥ちたかも知れない暗黒の底までは、決して行かないと信ずるものである。これは恐らく誤つた見方ではない。大切に心に留めて置くべき事である。

善なるは惡しきに勝り

優しきは暴きよりも安らけく

正氣なるは狂えるよりも願はしきなり。

よし黒雲は全地を覆ふとも
 吾が望みこそは太陽を射んことなれ。
 よし地の極までもさ迷ひ行きて
 道盡くるとも再初めに歸らん。

涙と共に播かれし種は
 悪しき實をばなごか結ばん。
 主の祝し給へる花は
 呪詛の焰火なごか枯らさん。

跋

公平なる眼を以てこれ等の物語を翫味したる讀者は、宗教の力を認めて、驚かざるを得ないであらう。

只、懷疑家は二つの疑問を提出する。

第一、此れ等の回心は永續するやと云ふ事。第二、宗教とは、單に精神興奮のある状態を非科學的に名づけたるに過ぎずとする事である。第一の疑惑によつて、回心の價値は危機に瀕し、第二のそれによつて、回心の事實が證明せんとする宗教上の眞理は、恐ろしく打撃を受けてゐる。是は、其の口は何事をも否定せんとし、其の精神は事を肯定するに甚だ吝かである現代に於ては、或ひは一般の見方であるかも知れないが、私は茲に此の二問を論駁して、其の淺薄さ加減を示し度いのである。

此の書物に記した物語中の多くの人々は、既に數年間悔悛を持續したのであつて、一人として此頃回心した者ではない。假りに彼等の變革が、一週間或は一ヶ月續

いたにしても、確かに驚くべく又貴い事である。然るにそれが既に幾年か持續してゐるのだが、疑問家は奈何云ふか。此處に一人の男がある。彼は救世軍が未だ現今の組織にもならず、救世軍とも呼ばれてゐないで、基督傳道會として一般に知られ、別に高帽隊とも稱へられてゐた當時に回心し、あらゆる困難と障害とを切り抜けて、永の月日を今日迄信仰を持續してゐる。

名はジョン・ガアライと云ひ、十四の時に家を飛び出して、田舎廻りの曲藝團に加^カ入して、敏捷な腕白小僧であつた。おまけに勝負事には何でも強く、此の一座の非道^{ヒドク}背徳にも恐す、永の浮浪生活を送つて誰にも敗を取らない位狡猾な、鐵面皮の無頼漢^{ムライマン}であつた。残忍に待遇はれ、粗食を供せられてゐるのだが、どこまでも不敵な横着な^{ムサシ}奴で、仲間と一緒に悪事に没頭し、出来る丈け面白可笑しく日を送つたのである。かくして成人になつた時には、大飲酒狂となつてしまつた。次から次へと曲馬團を渡り歩いたが、これもこれも追ひ出され、終には乞食になつて「働きの出来ない男」になり下り、猫を食ふ様な眞似までして、やつと酒を飲ませて貰つて居た。

居酒屋で「土方錢」とか「五十錢一本」とか云はれる僅かの褒美の爲めに、何でも構はない。死んだ猫でも持つて来てやると、それをその場で喰つてしまふ。そして「猫喰」ひと云ふ名をつけられても何とも思はず、多くは犯罪で生活し、常に巡査の眼を忍んでゐたのである。

或時、とあるロンドンの公園の藪の中に寝てゐたが、不圖目覺めて見れば、一團の^{ヒト}人が、近い處に天幕を張つて集つてゐる。男の人達は、高い帽子を被り、黒い上衣を着てゐる。「猫喰ひ」は、此奴等てつきり探偵に相違ないと早合點し、立ち去らうとすれば其の人達は、彼を捕へて話し掛け、此から宗教の集會をするのだから来いといふ。で彼はよろしい、然し乍ら若しそんな事を云つて騙し撃をするのであつたら、二人や三人は殺して呉れるぞと答へながら、半信半疑で漸く天幕に入つて聽てゐたが、其處で遂に回心したのである。そして善良ならん事を願ひ、天の恵を祈つた。又其の傳道者達に前生涯を告白して、之より新生涯に入るべき事を約したのである。彼等は深切を盡し、新生涯を始めるのに援助を與へ、新生の状態をよく看守つて呉れた。やが

て彼は一人の婦人と結婚した。彼女は、彼が最初檻樓のまゝの悲惨な姿で、悔改の座に身を低くして、心から祈るのを見て居たのであつた。

彼は今老人となり、ロンドンに於て相當の商業を営み、妻と共に、幸福な裕福な生涯を送り、篤い信仰を以て宗教に従つてゐる。此の永い絶えざる労働の間、前の飲酒狂、乞食、遊惰漢、猫喰ひは、一度も、以前の悪生涯を振り返つて見なかつたのである。

さて之は、救世軍の歴史よりも未だ古い回心の話であるが、こんな例は他にも澤山あり、多くの頁を塞ぐ事も出来る。自ら此の問題に就て研究した事の無い讀者に保證するが、記録の示す處に依ると、一生大勝利に終つた回心者の割合は、失敗したる者に比して非常に多いのである。之は疑問の限りでない。要するに「外見上の失敗」に於て示したる如く、回心したる人が蹉跌したのは、却て之に依つて、人間の中には悪と善との大奮闘の存する事の證據を提供し、二重性に就いて、更に根本的に考ふべきことを促し、我等の心に此の奮闘状態を如實に感せしめる。而して、此の奮闘に

要する一方の力として、宗教の極めて緊要なる事を示すものである。何の故に、善良ならんとする闘が起るか。唯物論は之を説明する事が能るか。如何にして宗教が、兎も角も人間を回心させるのか。懷疑論は之を解釋することが能るか。扱て、是は果して「宗教」であるか。此度は懷疑家の第二の反對論に答へなければならぬ。

科學が回心の心理的方面を如何に解釋し、又宗教とは感情興奮の一状態に名けた拙い名であるか、如何に明瞭に示しても、科學自らは、喪はれたる者を救ひ、棄てられたる者を濟度しようとも爲しなければ、又濟度する事も出来ない。私はこゝに充分力を入れて、この事實を指摘し度いと思ふものである。科學は、何でも物事が如何にして爲されたかその原因を知り、それは奇蹟で無いと證明した處で、自分にはそれが能き無いのだ。又それをやらうともしない。それは此の奇蹟を行ふために是非必要ない宗教的衝動が、自分には無いからである。奇蹟は、單に人々を回心せしむるに止まらず、非道極悪の人を回心せしめんとす情熱を、善良高德の人の心に發せしむるもので

ある。宗教が人の性格を改革して、新生の經驗を與へるといふのは驚くべき事であるが、それにも増して驚嘆すべきは、純潔、正明なる人々をして、墮落した、下卑た喪はれたる者を愛せしむるに至る事である。私は信ずる。社會の無頼漢を救済せんが爲めに、己が生命を與ふる温良なる人々の愛と信仰こそは、回心に關する大きな證言である。宗教のみ、よく此の種の崇高なる衝動を創造するものである。

學校で上成績であつた爲めに、却て歪んだ痲痺した智能を贏ち得た哀れな友が、頻りに私を説いて、其の善良な人達の愛だとか、犠牲だとか云ふものは、何も賞讃する價値がない。何故ならば、自分が好んで、好きでやるのだからと主張する。そこで私が、若し彼等が其の働を愛し、其の心が幸ひで無かつたならば、奇蹟も、功德も無いのだと、如何程説明しても一向解らぬらしい。如何なる犠牲も正義の働きも、若し愛なくして行はれたならば、無益であるとは、蓋し基督の啓示の中でも最も深い教へでは無いか。人の魂を救はんどの愛心こそ、宗教の眞理を最も良く證明するものである。此の批評家は、墮落した人間を救ひ出す爲めに、自分の指一本染めないで

ゐて、無慾な愛の働に就て、善良なる人々の事を兎や角言ふ事は出来ても、それでは如何にして其人達が之を愛するに至つたかと云ふ事になると、説明が能き無いのだ。そこが宗教である。

私は公平なる讀者に、此の書物を捧げると同時にお願いする。何卒か次の諸點を心に留めて、忠實に、常識を以て、上述の物語を考慮へられん事を。

悪人、それも根本的に悪く、國家の重荷となり、文明の汚辱であり、人類の汚名たる如き悪人も、宗教の感化の下に、善良にして忠誠な、勤勉にして親切なる者となる事。家庭、而も子供等は虐待せられ、窮乏と暴力との爲めに人生の善美と幸福とを見る事すら出來ず、下劣、汚穢、残忍の有様は、筆にも舌にも述べられない程の家庭でも、宗教の感化の下に、幸福な端正な喜ばしいものとなる事が出来る事。

悪習、それも人間を獸類以下に引き墮し、相當の人からは、見るも眼の汚れたと思はれ、監獄や養育院を繁昌させ、社會に大なる重荷を負はしめる程の悪習も、宗教の感化の下には忽ち其の力を亡ぼされ、己が喰物にして居たゝめに、息の根も止らば

かりになつて居た魂から離れ去り、恰も枯れた藤蔓か、衣古された衣装かの様に落ちてしまふ事。

罪と犯罪、それは人類の進歩を妨碍し、あらゆる腐敗、墮落、卑賤の原因をなして居るのだが、宗教の感化の下に、人の心を支配するの權を奪はれ、回心の瞬間に於て恐るべき敵なりと見らるゝに至る事。

讀者は此れ等の諸點を心に留めて、若し此の世に唯物論が宗教を征服し、人生は只生存競争に過ないものだと、人類の大多数が教へられたならば、果して如何なる結果を生むであらうかを考へなければならぬ。法律と、優生學はよく吾人の進化を保證し得るであらうか。ソクラテスは、奮闘を経て始めて高德に達した事を告白してゐるが、極端な進化論者は、初めから彼の如きを否定して、其代りにネロ王を据ゑるであらう。」とゴルドウイン・スミス教授は、巧妙く云つてゐるが。ソクラテスと一緒に、アウガスチンやセント・フランシスやダビデや其の他多くの正義に達する爲めに奮闘した人々の名を擧げることが出来る。此れ等の人々の奮闘の模範は、代々最高の徳に

達せんとして、奮闘せる無数の人を助け勵ましたのである。唯物的見地からでも可いから、スミス教授が、良心の制裁に宗教の必要なる所以を述ぶるのを聞いて見よう。

「若し人生が此の世限りのものならば、良心の權威は何處に保たれるであらうか。良心の權威は宗教的であると思ふ。……宗教の制裁なくして、善にせよ惡にせよ、有利にしる有害にしる、人が只法善の柵内にのみ生活して、警官の眼を免れる事許り考へてゐるならば、自分の心の向ふまゝに動かないでゐられるであらうか。甲は生來羊の如く、乙は生來虎の如くである。されば法律も許し自分の力も有る限り、虎は虎の性質に従ひ、羊は羊の性質に従つて、何を爲ようが不道理は無からう。例へばエクセリノは生れつき惡鬼の化身で、惡を熱愛する惡魔であつたが、彼が自分の力の有る限り、氣儘に己れの嗜好を満足させたからとて、功利主義の道德から論ずるならば、何の不都合があらうぞ。」

良心の無い生涯は、破壊的な動物主義に歸するより他なく、宗教なき良心は、自らを制御すべき力も名分も持た無い事になる、と云ふのは常識でも知れる。

親しく人生を知り、都會たるを田舎たるの論なく存在する悲み、苦痛、慘狀、罪惡に就て深い知識を有し、圖書館で讀む書物や、客室で偶然起る議論にのみ己が知識を限られてゐない人々は、多くの人類改善の爲めに働いてる勢力中、宗教のみが、人の性格を革新し、惡人の魂を改良するの力を有する事を知つてゐる。しかもそれを己が知識の第一公理として居る。立法によつて、貧民に善良なる家を興へ、その子供を教育し、飲酒と犯罪の機會を少なくし、多少眞面目に又斷乎として、犯罪者を懲し、以て道徳的改良を促す事も能うであらう。けれども、宗教を除外しては、人類進化の將來が懸つてゐる後世子孫に、靈的喜悦と、愉快なる元氣とを興へることは不可能である。

「熱烈ならざる心は純潔にあらず、熱誠ならざる徳は確實にあらず。」

此の書物に記した人々の家庭を訪れて、その溫和、深切、高雅なる空氣を味ひ、翻つて、之を圍繞く多くの家庭の垢じみた慘めな様を見るにつけても、世間が、何故にかばかり宗教に對して信用を興へず、立法によつて、苦心して、鈍臭い拙い法律を制

定し、出来もしない事を試みてゐるのか全く解らない。もしも社會の全勢力が、其後援となるならば、宗教は忽ちに、これほど大きな事業をなすか解らない。

我が英國の救に就いて、今一層大なる信仰が必要である。神無くしては、一切の建設の事業も無効である。(完)

大正二年十二月二十二日印
大正二年十二月二十六日發
昭和六年一月二十日改訂六版發行

定價五十錢

(送料八錢)

不許
複製

編輯兼發行者 山室軍平

東京市神田區一ツ橋通町五番地

印刷者 秋本宗市

東京市麴町區內幸町一丁目四番地

印刷所 ヘラルド社印刷部

東京市麴町區內幸町一丁目四番地

東京市神田區一ツ橋通町五番地

發行所

救世軍出版及供給部

(振替東京四四〇〇番)

終

